別表 113

秋田県文化財調査報告書第81集

藤木遺跡発掘調査報告書

1981・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県
埋蔵文化財センター
60.5.17
受入番号
4085

序

藤木遺跡は県営ほ場整備にかかる遺跡であったため，その記録保存をはかることを目的に発掘調査を実施いたしました。

遺跡の多くはすでに破壊されていて，今回調査した1,400㎡だけが畑地とし残っていたものです。

調査の結果，平安時代の掘立柱建物，井戸跡などの遺構の他，土師器，須恵器，墨書「伴」などが発見されました。これらが発見された藤木遺跡は県指定文化財に指定されている考古資料を出土した碇遺跡や，国指定史跡払田柵跡などとも関係する遺跡と考えられます。

このように一つの遺跡は色々な遺跡との関連で解明される場合が普通であり，そのことから一つの小さな遺跡でも無視できないものと考えられます。

藤木遺跡は今となってはどの位の規模の遺跡であったかは推し測る余地もありませんが，今回の記録はその一部分とは言え，永遠に残る歴史資料と考えられます。

この報告書がその意味で広く活用されることを望むものであります。

最後に大曲市教育委員会はじめ発掘調査から報告書刊行までご協力いただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和56年３月

秋田県教育委員会
教育長　畠　山　芳　郎

例　　言

1．この報告書は，秋田県大曲市藤木字一本柳谷地に所在する藤木遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．藤木遺跡に関する諸発表等と，本報告書との記述に相違ある場合には本報告書の記述を正確なものとする。

3．報告書の執筆は畠山憲司が担当した。

4．報告書中の挿図のうち，出土遺物は三嶋隆儀が主体となって作成した。

5．土色の記載については「標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

6．挿図のうち遺構については一部を除いて1/80に縮して掲載した。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに…… 1
　第１節　発掘調査に至るまで…… 1
　第２節　発掘調査の組織と構成…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 3
　第１節　立地と環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
　第３節　周辺遺跡…… 3
第３章　発掘調査の概要…… 5
　第１節　遺跡の概観…… 5
　第２節　調査の方法…… 5
　第３節　調査経過…… 7
第４章　調査の記録…… 8
　第１節　発見遺構と遺物…… 8
　第２節　その他の出土遺物…… 18
第５章　まとめ…… 28

挿図目次

第１図　遺跡の位置…… 2
第２図　遺跡の周辺とグリット配置図…… 4
第３図　発見遺構全体図…… 6
第４図　ＳＢ05建物跡…… 8
第５図　ＳＢ07建物跡…… 9
第６図　ＳＢ11建物跡…… 11
第７図　ＳＥ03井戸跡…… 12
第８図　ＳＥ03出土遺物…… 13
第９図　ＳＫ02土壙…… 14
第10図　ＳＫ02出土遺物…… 15
第11図　ＳＫ04土壙…… 16
第12図　ＳＫ04出土遺物…… 17
第13図　ＳＫ06土壙…… 18
第14図　ＳＫ06出土遺物…… 19
第15図　ＳＸ01出土遺物…… 20
第16図　その他の出土遺物(1)…… 22
第17図　その他の出土遺物(2)…… 23
第18図　その他の出土遺物(3)…… 24
第19図　その他の出土遺物(4)…… 25
第20図　その他の出土遺物(5)…… 26

図版目次

図版１　遺跡全景・発見遺構全景

図版２　調査区土層状態・ＳＢ05掘立柱建物跡

図版３　ＳＢ07掘立柱建物跡・ＳＢ11掘立柱建物跡

図版４　ＳＥ03井戸跡

図版５　ＳＫ02土壙

図版６　ＳＫ02土壙・ＳＫ04土壙

図版７　ＳＫ06土壙

図版８　ＳＸ01焼土遺構・ＳＢ05柱穴完掘状況

図版９　柱穴断面状況・柱穴完掘状況・遺物出土状況

図版10　遺物出土状況

図版11　ＳＥ03・ＳＫ04・ＳＫ06出土遺物

図版12　ＳＫ06・ＳＸ01出土遺物

図版13　その他の出土遺物(1)

図版14　その他の出土遺物(2)

図版15　その他の出土遺物(3)

図版16　その他の出土遺物(4)

第1章　はじめに

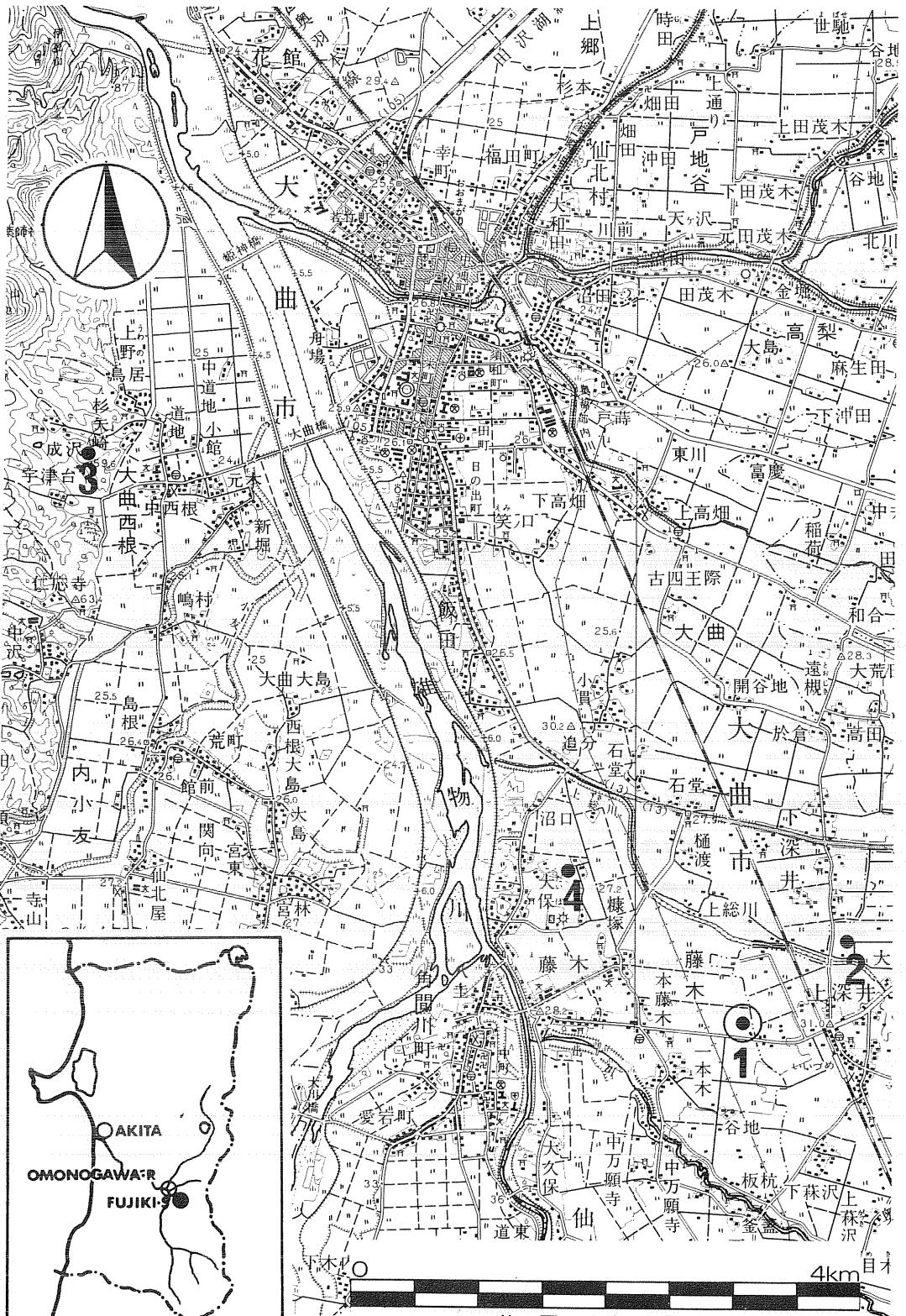
第1節　発掘調査に至るまで

大曲市に所在する藤木遺跡は，昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録された，いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和55年度より実施される県営ほ場整備事業地域内にはいるため，秋田県教育委員会が，昭和54年10月22日～24日，遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果，平安時代に属する土師器，須恵器等が多数発見された。

このため秋田県教育委員会は，工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存をはかり，今後の資料に資するものとした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	藤木遺跡
遺跡所在地	秋田県大曲市藤木字一本柳谷地
調査期間	昭和55年6月30日～7月23日
調査対象面積	1,200㎡
調査面積	1,400㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆，三嶋隆儀
事務補助員	斉藤知子
調査協力機関	秋田県仙北平野土地改良課
	大曲市教育委員会



第１図　遺跡の位置

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

藤木遺跡は横手盆地の東北部中央，六郷扇状地の西部末端水田中に位置する。六郷扇状地の扇央から扇端にかけては多くの湧水があり，縄文時代から中世にかけての遺跡が散見される。

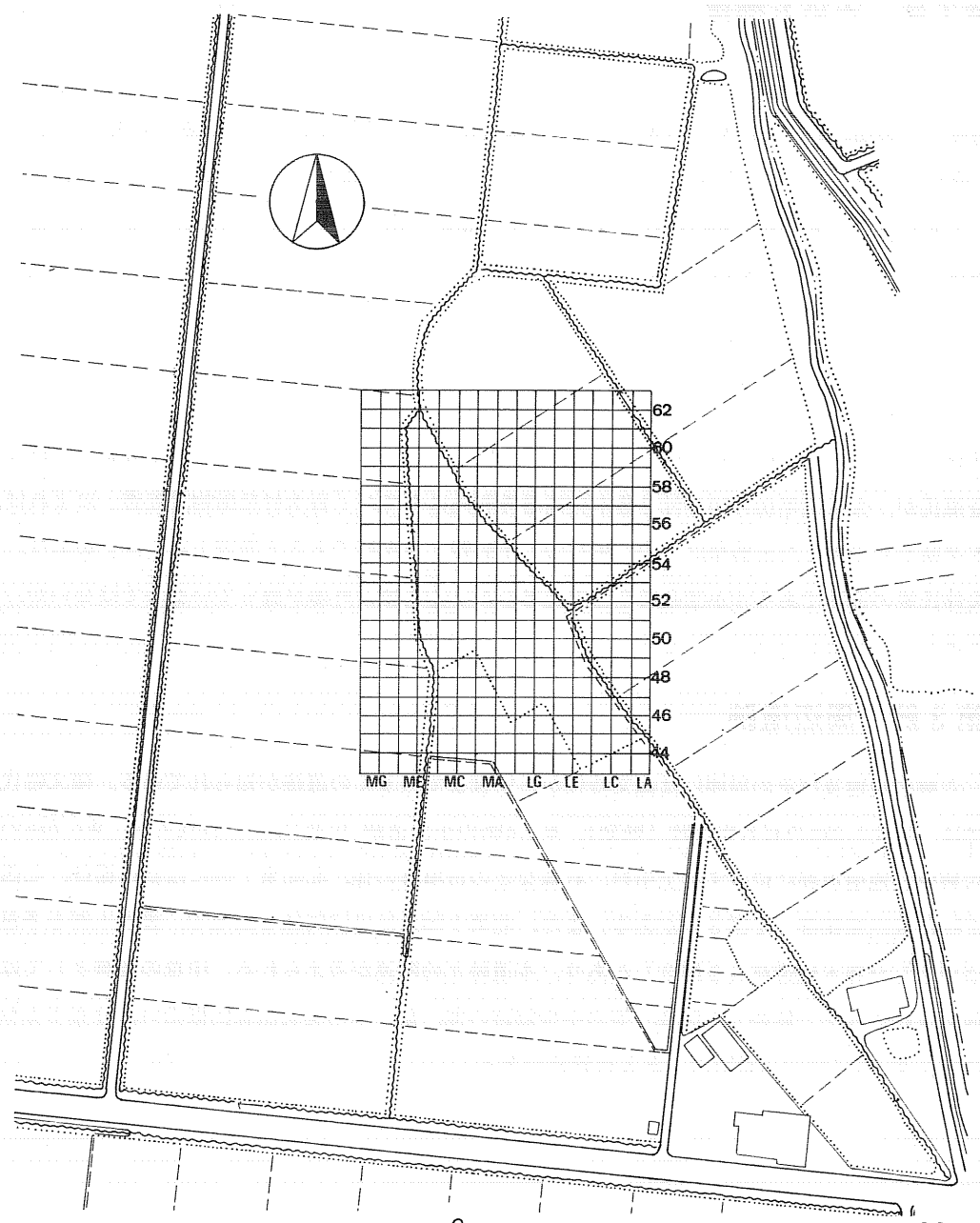
遺跡の周辺は全くの平坦面で，古くは部分的に谷地化した湿地もあったようで，「谷地中」，「千間谷地」，「菅谷地」等の地名が残っている。遺跡の南西約１kmには六郷扇状地中央を通り西流する出川があり，西約2.3kmで雄物川に達する。

第２節　歴史的環境

藤木遺跡周辺は過去３回の耕地整理が行われ，いくつかの遺物が採集されている。これらの遺物に対してはいわゆる郷土史家などに若干の感心をいだかせていた。秋田県史編纂主任長井金風氏が，大正元年10月10日付で藤木村高階秀和氏にあてた「藤木村発掘物調査書」によれば，本遺跡から出土した土器類は，①（現在の）土師器，須恵器である②墨書土器「伴」があり，大伴氏族の遺跡であろうか③糸切り底の土器がある④古墳と外堀が残っているのではないか，と述べている。

第３節　周辺遺跡

六郷扇状地及びその周囲には縄文時代から中世までの多くの遺跡が知られている。縄文時代では，東北2.2kmの石名館遺跡（晩期），東3.4kmの小出遺跡(中期)など。古代では，東6.5kmの六郷扇状地扇頂部に位置する上中村，石森などの古墳群の他，北北東７kmには払田柵跡，北西７kmに成沢窯跡群（１図３）がある。また，北東１kmにはほぼ同様な立地で，墨書土器を多量に出土した藤木碇遺跡（１図２）があり，本遺跡との関連が考えられる。中世の遺跡としては西2.5kmの四十二館跡（１図③）等の中世館跡の他，東７kmの奥羽山脈西裾沿いに分布する板碑群，東北3.5kmの六郷町内にある板碑群がある。



第２図　遺跡の周辺とグリッド配置図

0　100m

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１．遺跡の層序

遺跡はかつての耕地整理等で大部分が破壊されており，わずかに残った1,200 m²ほどの畑地を主な調査対象とした。この畑地での堆積土の層序は以下の通りである。

第１層　黒褐色耕作土（15～20cm）

第２層　極暗褐色土（10～15cm）

第３層　黒色土（15～20cm），遺物包含層

第４層　褐灰～褐色土（10cm），漸移層

第５層　地山土，黄褐～褐色粘質土

これに対し，この畑地の南側水田中では第１層耕作土，第２層暗褐色土の下はすぐに地山灰黄色粘質土であった。

２．遺構の分布

今回の調査で検出された遺構は全てが畑地部分からのもので，掘立柱建物跡，井戸跡，土壙などである。掘立柱建物跡は調査区西側で，桁行方向を北西―南東にして縦に連なる形であり，井戸，土壙などはこれら建物群の東側に存在する。水田中からは遺構は全く検出されなかった。

３．遺物の出土状況

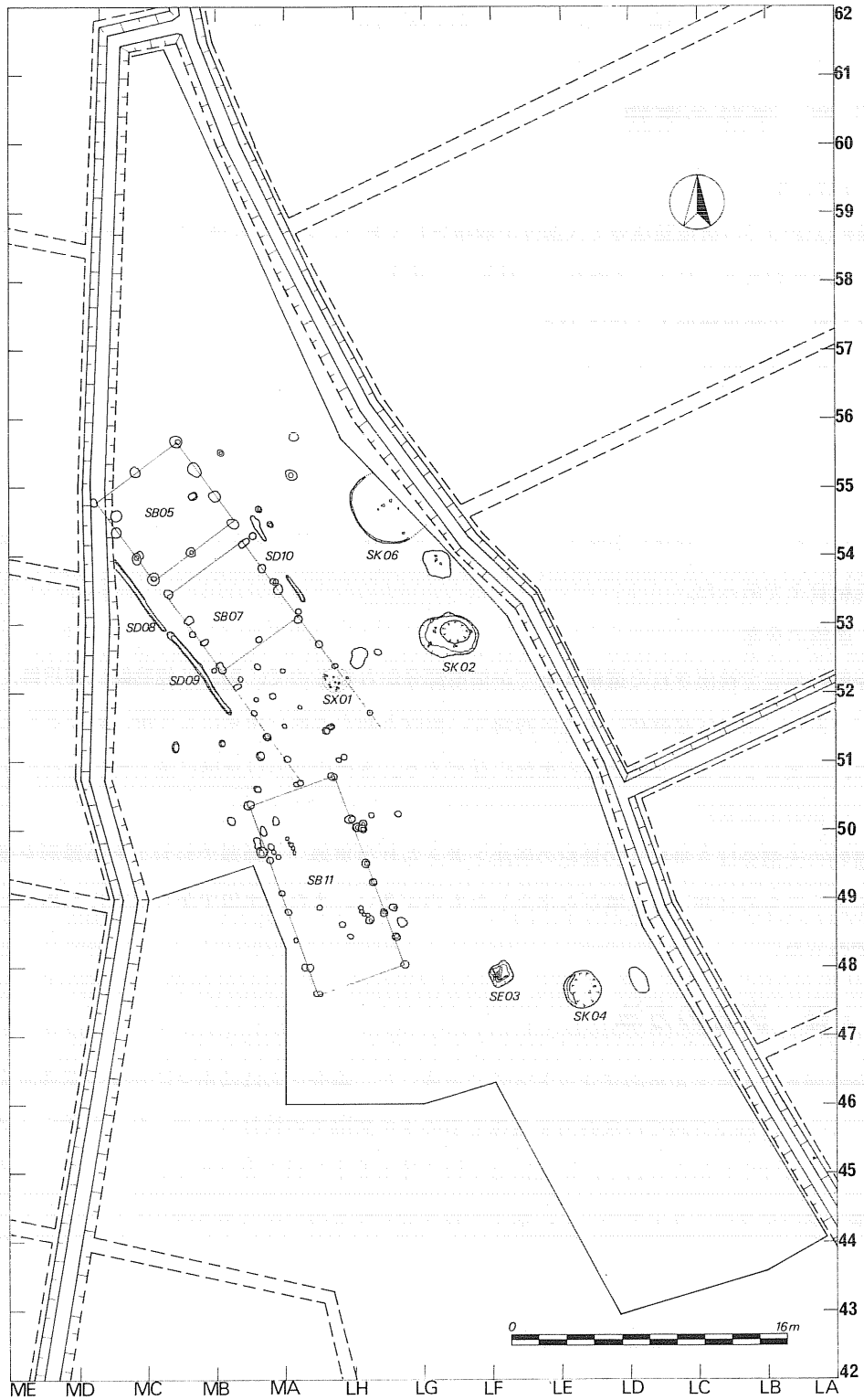
遺物の大部分は９世紀～10世紀の所産と考えられ須恵器，土師器でおおよその器形を推定し得るようなものは井戸，土壙から出土したものが多い。また，水田中からは数片を出土したのみであった。

第２節　調査の方法

発掘調査は４ｍ×４ｍのグリッド方式で実施した。調査区のほぼ中央に任意の基準点を設置し，ここから磁北方向での東西南北基線を求め４ｍ間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット２文字の組み合わせ，南北には２桁の算用数字の組み合わせとし，各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット，数字の組み合わせを用いた（ＭＡ50，ＬＥ46など）。

実測は原則として縮尺1/20とした。

遺構の名称は掘立柱建物跡＝ＳＢ，井戸＝ＳＥ，土壙＝ＳＫとし，これに発見順に通し番号を付した。ＳＫ01，ＳＫ02，ＳＥ03，ＳＫ05，ＳＢ05などのごとくである。


SB05
SD10
SK06
SB07
SD08
SK02
SD09
SX01
SB11
SE03
SK04
0
16m
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
ME
MD
MC
MB
MA
LH
LG
LF
LE
LD
LC
LB
LA

第3図　発見遺構全体図

第３節　調査経過

発掘調査は６月30日から７月23日まで実施した。

６月30日，現場作業の説明の後，早速表土剝ぎを開始。調査予定地は1,200㎡ほど残った畑地の部分にしぼり，土層の観察をしながら進めた。

７月２日，調査区中央部でＳＸ01を検出。焼土の中に土師器，須恵器片が散在している。同日，ＳＸ01の東でＳＫ02を検出。黒色土の落ち込みの中に火山灰と思われるサラサラした灰黄色土が円形に分布していた。９日，調査区南部で方１ｍの黒色土の落ち込みを検出，ボーリング探査して，井戸跡と判断した（ＳＥ03)。また同日，ＳＥ03の東側でＳＫ02に似た落ち込みを検出（ＳＫ04)。須恵器のやや大きめの破片が見られた。11日，調査区北東部でこれまでの土壙よりは大きいＳＫ06を検出。中央部に須恵器杯，壺などがバラバラに出土。この間，調査区の南西水田中を約200㎡ほど地山直上まで調査したが，遺物はほとんどなく，遺構も全く確認できなかった。

土壙，井戸跡の調査などと併行して，第３層遺物包含層，第４層を掘り下げ，地山土上面で柱穴を追った。柱穴はほぼ一定の方向に連っており，おおよそ３棟の掘立柱建物跡を確認した（ＳＢ05，07，11)。

３日に１日くらいの降雨に見舞れながら土壙，井戸，柱穴の精査，実測，写真撮影などを行ない，７月23日，全ての調査を終了し，24日，発掘機材の搬出，25日，プレハブの解体を行った。最後の日も雨であった。

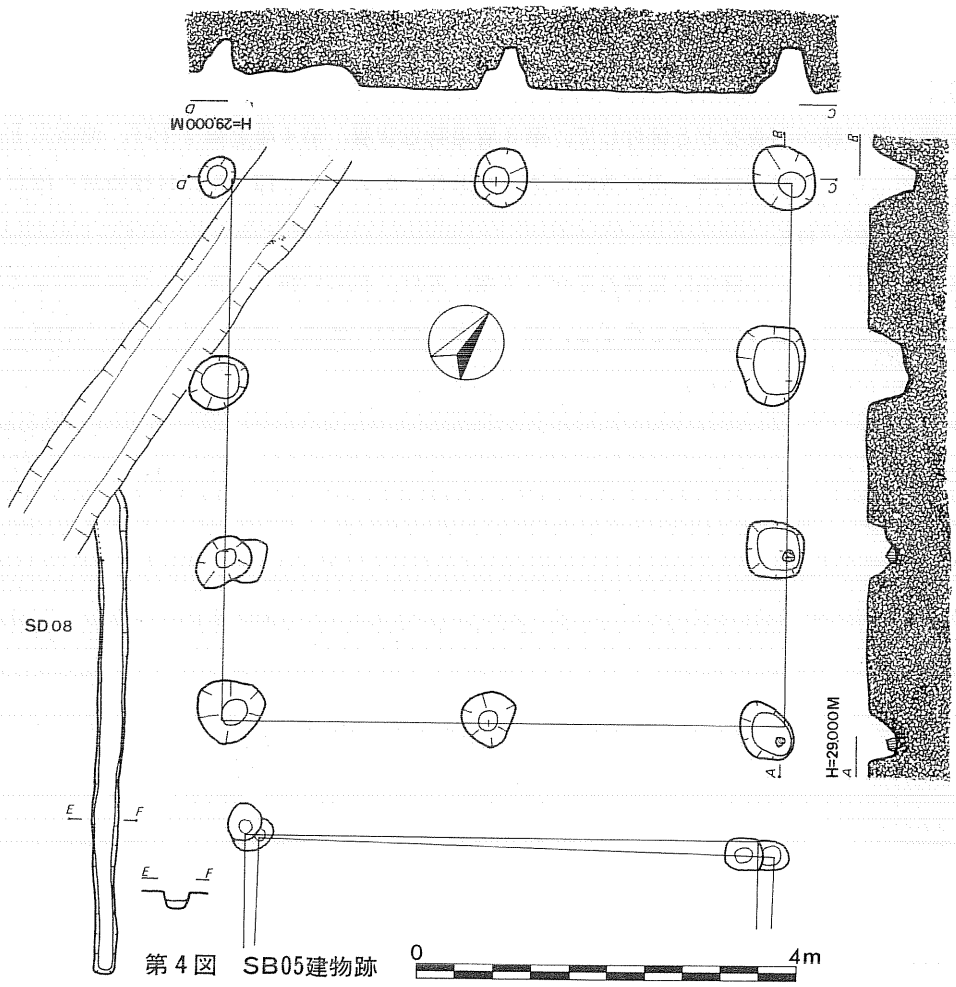
第4章　調査の記録

第1節　発見遺構と遺物

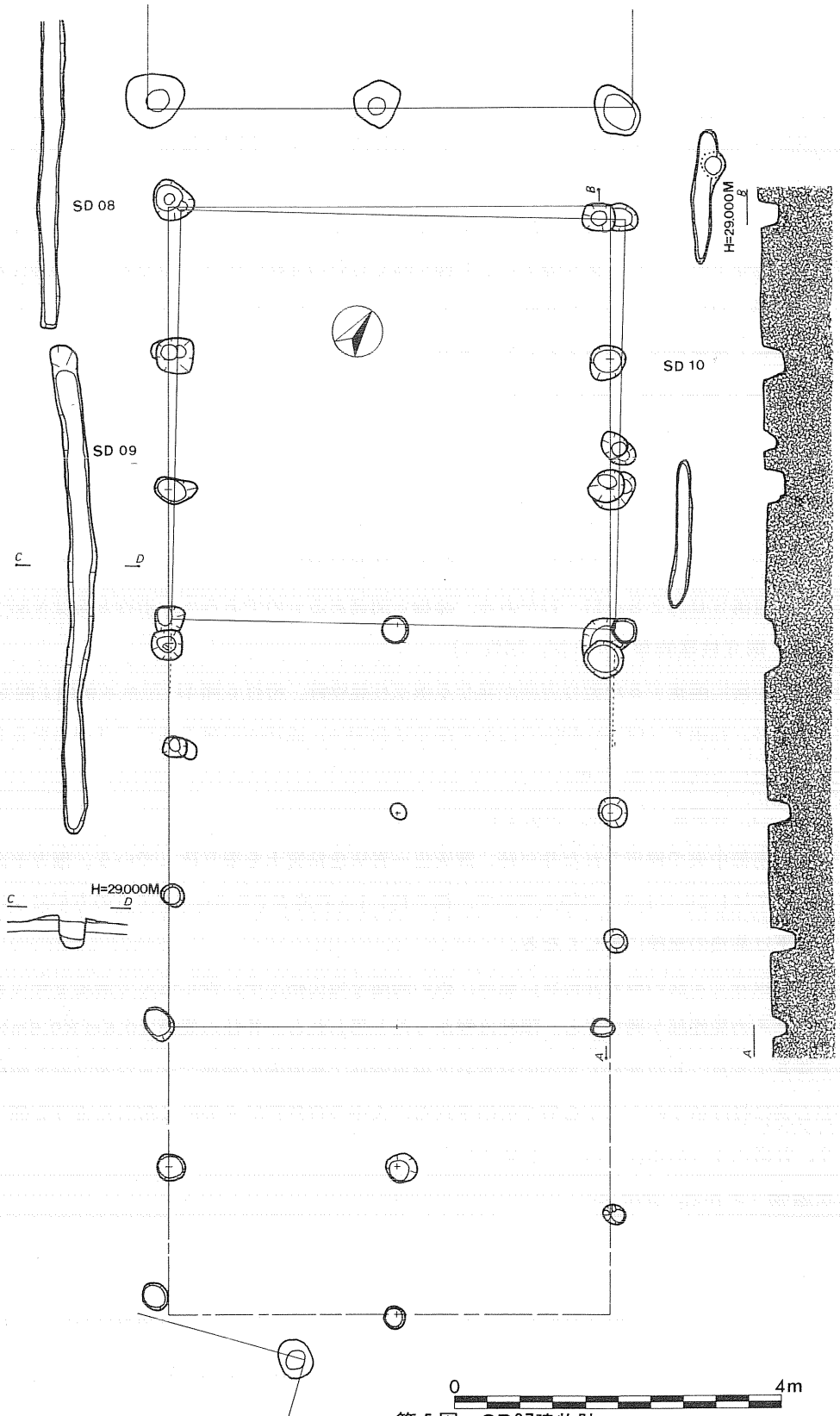
今回の藤木遺跡発掘調査で発見した遺構は掘立柱建物跡3棟，井戸跡1基，土壙2基，竪穴状遺構1基，溝状遺構4条である。柱掘方埋土中から平安時代中葉頃の土師器片などが出土している。

1．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はその桁行方向，並行する溝状遺構の存在などにより大きく2つに分かれる。



第4図　SB05建物跡



第５図　SB07建物跡

ＳＢ05，掘立柱建物跡（第４図，図版２）

調査区北西部にある桁行３間×梁間２間の略方形の建物跡。桁行は総長574 cmで南から178 cm＋187 cm＋209 cm，１尺を31cm前後とする６尺等間である。梁間は総長591 cmで東から311 cm＋280 cm，10尺＋９尺と思われる。柱掘方は確認面で径50cm～80cmの不整円形ないし略方形。深さは30～50cmで，底面に行くに従いせまくなる。柱根が２本残っていたが，径15cm前後で腐食によりやせていた。柱アタリ等からして径20cmくらいの丸柱に近いものであろう。桁行方向はＮ35.5°Ｗ。西側柱列の約１ｍ外側に桁行方向に並行する溝状遺構（ＳＤ08）がある。ＳＤ12とも合わせて本建物跡に関連するものであろう。

ＳＢ07，掘立柱建物跡（第５図，図版３）

ＳＢ05の南に隣接して桁行方向をほぼ同じにする掘立柱建物跡。東西の桁行側柱列が対応するのは北部分３間のみで，それより南は判然としない。あるいは第５図よりも桁行の少ない建物が隣あっているのかもしれない。北部柱掘方に若干の切り合いがあり，桁行３間×梁間２間程度の建物が重複している可能性もある。桁行側柱列の西約１ｍと東約0.8ｍに方向を同じにする溝状遺構ＳＤ09とＳＤ11，12がある。建物と関連あるものであろう。桁行方向はＮ36°Ｗ。

ＳＢ11，掘立柱建物跡（第６図，図版３）

ＳＢ07の南に隣接するが桁行方向が異なる掘立柱建物跡。桁行６間11.70ｍ×梁間１間5.24ｍの長方形。柱掘方は径30～40cmの円形で深さは約30cm。径15cm前後の柱アタリのわかるものもある。桁行方向はＮ20.5°Ｗ。

２．ＳＥ03，井戸跡（第７図，図版４）

調査区南部中央で検出された井戸跡。黄灰色～青灰色粘質土を掘り込んでいる。掘方平面形は確認面では1.2ｍ×1.3ｍの隅丸方形で，深さ約1.1ｍの地点で0.6ｍ×0.6ｍの方形にすぼまり，以下は井筒の規模に等しくなる。

井壁は板井で４枚の板を井桁状に組み，板の両端を地山粘土中に押し込んで固定させており，粘土中にその先端部が残在する。隅柱は無かったと思われる。井筒の規模は0.6ｍ×0.6ｍの方形で深さ1.5ｍ。井戸底近く大小の自然石と須恵器杯，長頸壺の頸部，ヒョウタンなどが板材などと共に投げ込まれたような形で検出された。大小の自然石は人為的に配したような様子もあり，井底の１つの施設であった可能性もある。

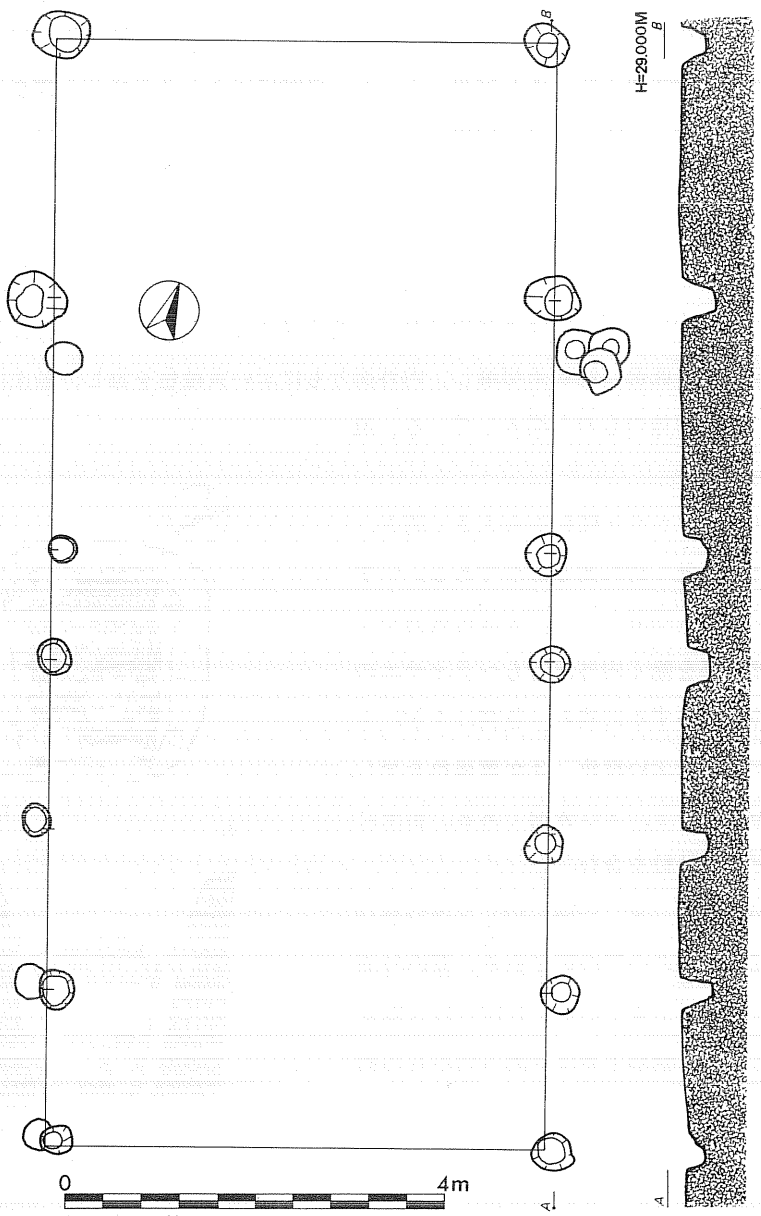
出土遺物（第８図，図版11）

須恵器杯２点，土師器杯４点，須恵器長頸壺１点が出土している。

須恵器杯（８図，２，６）。２は約¼程の破片。口縁部が「く」の字状に外反する。内外面ともに灰色を呈し，焼成良好で砂粒を若干含む。底部は回転糸切離しで，再調整はない。６は２次的加熱を受け，煤などが付着したものか外面が黒色を呈する。砂粒を若干含み，焼成はあま

り良くない。

土師器杯(第８図，１，３～５)。３は完形土器。胴部が外に開きながらも直線的に立ち上がり，口唇部でわずかに肥厚する。底部は回転糸切離しで，再調整はない。内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土に細砂粒を多く含む。焼成は普通。胴部中位に「伴」の墨書がある。１も３とほ



第６図　SB11建物跡

ぼ等しいが全体に薄手で底部に墨痕がある。字は不明。4，5は胴部～口縁部の小破片。色調等は3にほぼ等しい。

須恵器壺（第8図，7）。頸部と肩部の接合部で離れた長頸壺の頸部破片。胎土に細砂粒を若干含み，色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は普通。

3．SK02，土壙（第9図，図版5，6）

調査区中央東端で発見された土壙。長径3.5m×短径2.6mの楕円形を呈し，深さ0.2mを測る。埋土中位にはサラサラした火山灰様の土を厚さ1～2cm含み，底部近くには禾本植物の焼けたような灰性の黒色土がうすく分布している。遺物はほとんどが破片で散在する。

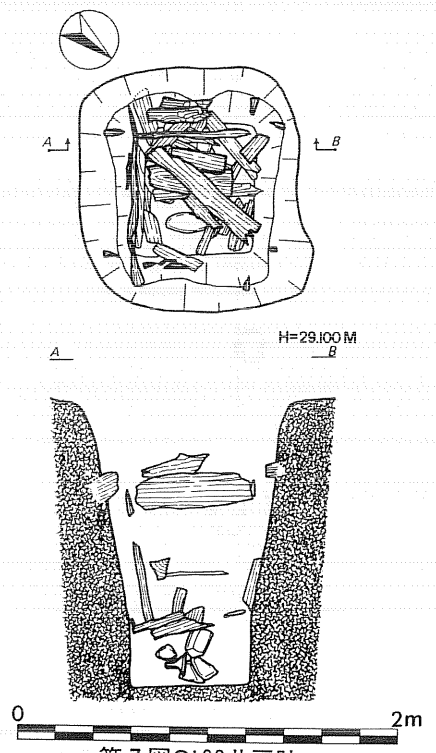
出土遺物（第10図，12図12，13，図版11）

須恵器杯（第10図，1，2）。1，2とも小破片である。1は明るい灰白色を呈し，底部は回転糸切離しで，再調整はない。胴部下半から底部にかけ墨書がある。「伴」かと思われる。2はくすんだ灰白色を呈する。1，2とも胎土に細砂粒をわずかに含み，焼成は良好。

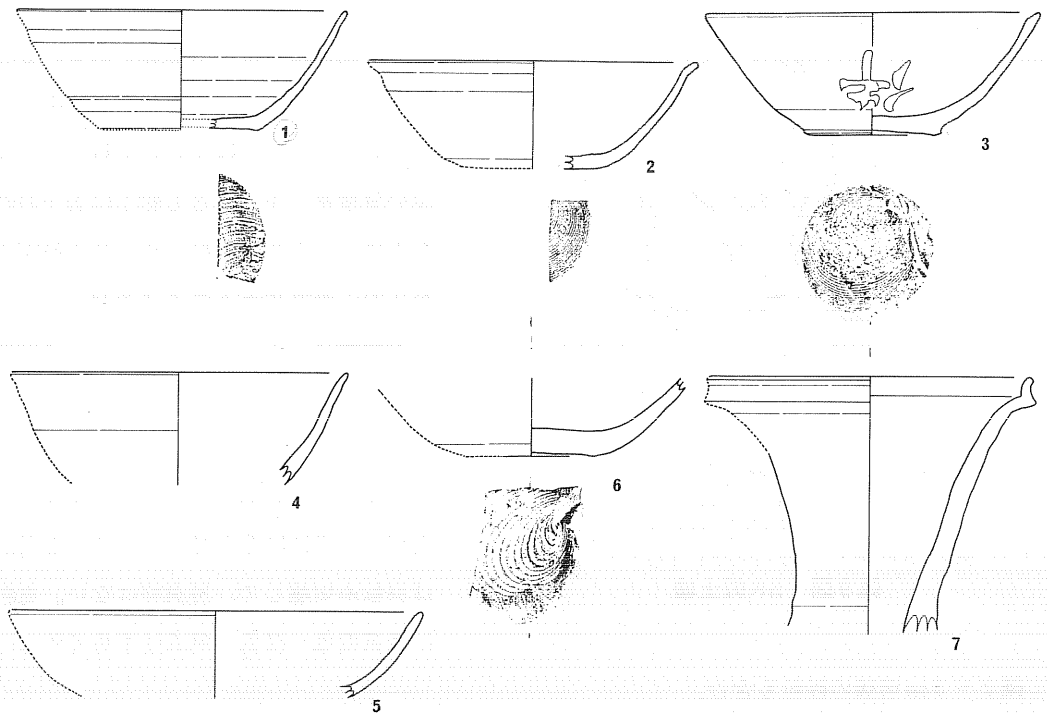
土師器杯（第10図3）。胴部は直線的に開く。他の杯に比べ深さがあり，杯よりも椀に近い器形となっている。底部は回転糸切離し。内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土には砂粒を含むが，径3～4mm前後のものも混入している。焼成は不良。

皿（第10図，4～6）。底部から大きく開き，口縁部で外方に強く折れ曲る器形である。いずれも底部は回転糸切離し。1，3は再調整がないが，2は底部を除く内外面ともヘラオサエのような調整痕がわずかに残る。色調は1がにぶい黄橙色，2がにぶい橙色，3が黄褐色を呈し，焼成は1が良好，2，3は普通である。胎土には1～3とも細砂粒を含む。

甕（第10図，7，8，12図，12）。7は口径14cm，高さ12cm前後の小型の甕である。器内外面とも剝落してボロボロである。12図12は長胴甕の底部であろう。胴部下半は斜め方向からの粗いヘラケズリが施されている。底面には砂粒が多く付着しているいわゆる砂底である。色調は7と12図12が灰黄褐色，8が浅黄橙色を呈し，焼成不良。



第7図SI03井戸跡



第８図　SE03出土遺物

0　10cm

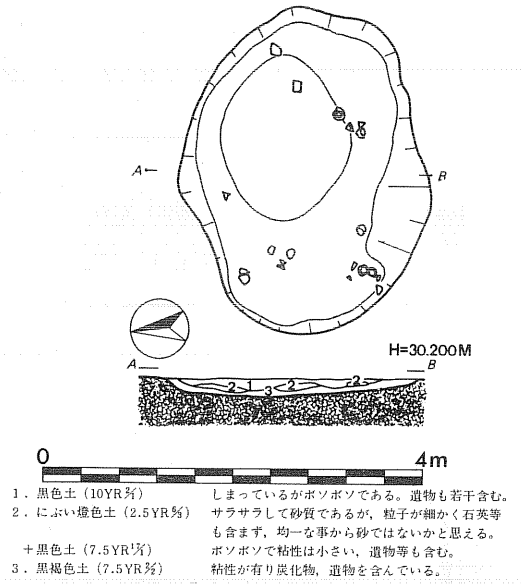
鍋（第10図，９，10，12図，13）。いわゆる土鍋である。いずれも小破片。10図９は口径41cmを測る。内外面ともに回転時での櫛状工具痕があり，外面はその後で手持ちのヘラケズリを施している。色調は黄橙色を呈し，内外面に黒斑がある。10は胴部下半で，外面にはタタキ目が手持ちヘラケズリによっても消えずに残っている。内面は櫛状工具によるカキ目があり，その上にアテ板痕が見える。12図13の外面はタタキ目が手持ちヘラケズリによって全て消されているが，底面のそれは残っている。内面にはカキ目痕が見えている。10，12図13とも，色調暗褐色を呈する。以上３片の土鍋は胎土に比較的砂粒を含まずよくしまっており，焼成も良好で，重量感がある。

ＳＫ04，土壙（第11図，図版６）

調査区南部，ＳＥ03井戸跡の3.5ｍ東で検出された土壙。径2.2～2.4ｍの略円形を呈し，深さ0.6ｍ断面浅鉢状。埋土中に火山灰様のサラサラした土が縞状に堆積している。

出土遺物（第12図，１～11，図版11）

１～３は須恵器杯で他は全て土師器。



第9図　SK02土壙

須恵器杯（1～3）。1は胴部が直線的に開き口縁に至る杯。底部は回転ヘラ切離し。底面に「伴」の墨書がある。2も回転ヘラ切離しで，1とともに色調は灰白色を呈する。3は回転糸切離しで，にぶい黄橙色。1～3とも胎土に若干の砂粒を含み，焼成は良好。2，3の底面にわずかに墨痕があるが字は不詳。

土師器杯（4～7）。4，5，7は口径は比較的小さいが胴部が大きな角度を持って立ち上がり，小型の椀のような感じを受ける。6は胴部がやや開き気味に立ち上がり，口縁に至る杯。4～7とも底部は回転糸切離しで，再調整はない。色調は浅黄橙色～橙色。焼成は不良で胎土に径2～3㎜前後の砂粒も含む。

皿（8，9）。8はやや深めの皿。口縁部に黒斑がある。色調は本来の地肌は灰白～浅黄橙色であるが，外面にはその上に赤味の強い橙色の化粧土が塗られている。9はやや浅めの皿。にぶい橙色を呈する。これも8と同様に化粧土が塗られていたようである。焼成は8，9ともやや不良。底部は回転糸切離し。胎土には砂粒を若干含むが，8はごくわずかである。

甕（10）。小型の甕。タマゴ色がかった灰白色を呈し，焼成不良。

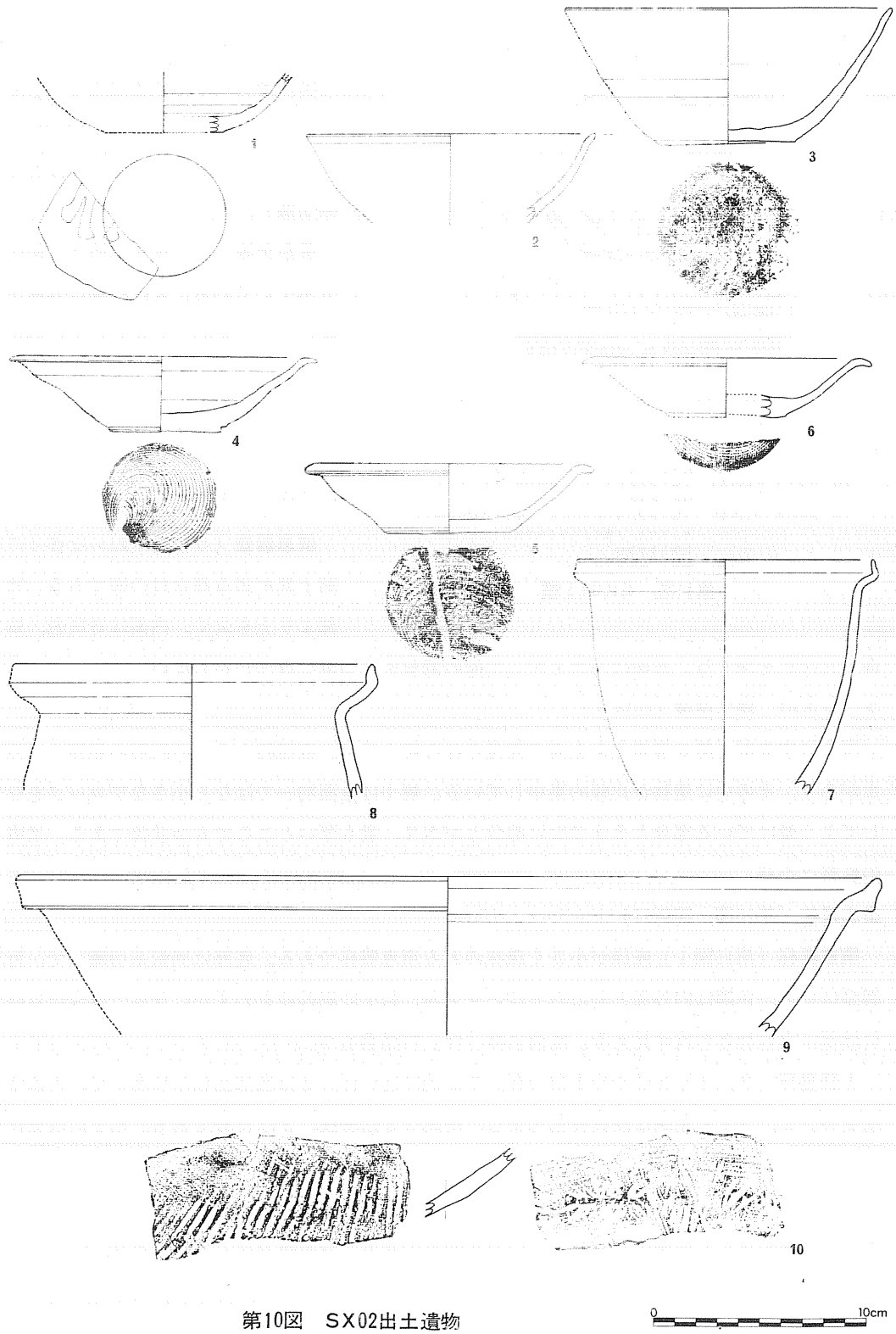
把手（11）。土鍋の把手と思われるが，あるいは支脚の可能性もある。

4．SK06，竪穴状遺構（第13図，図版7）

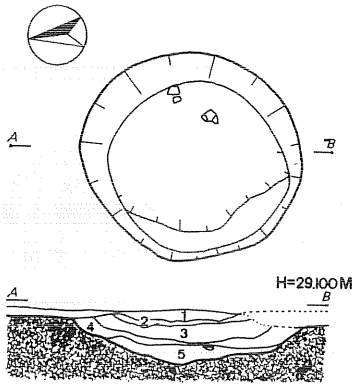
調査区北部，SB05建物跡の東方約7mにある。径約4.3mの略円形を呈し，10～15cmの深さを測る。壁はゆるやかな部分もあるが，急激に立ち上るところもある。遺構確認面直下に，植物の焼けた灰状の炭化物が広く分布していた。底面直上に厚さ0.5～1cmのよくしまった層があり，貼り床的な趣もある。遺物は埋土上部に散在する。東半は後世の耕作等で破壊されている。

出土遺物（第14図，図版11，12）

須恵器杯（1，2）。1は口径に対する底径の割合が他の土器に比べやや大きな杯。短かい胴部が開き気味に立ち上がる。色調はにぶい橙色を呈し，焼成も全く不良であるが，底部は回転ヘラ切離しである。器面が荒れ再調整の有無は定かではないが，わずかに手持ちヘラケズリを施しているようにも見受けられる。2は明るい灰白色。底部は回転ヘラ切離し。再調整の有無は



第10図　ＳＸ02出土遺物



1層　黒褐色土（7.5YR3/2）　かたく粘性がなく，ボロボロである。炭化物を多少含む。
2層　黒褐色土（7.5YR3/2）＋黒褐色土10YR3/2，1層と比較すると，やや粘性がでてくるがやはりもろい。また（にぶい黄色土2.5YR5/3）砂質状で，さらさらのものが，帯状に含まれている。
3層　黒褐色土（7.5YR3/1）　1層と比較すれば，さらに粘性が強くなる。炭化物，遺物を多少含む。
4層　黒褐色土（7.5YR3/2）　3層と非常に良く似ているが，3層よりは粘性が強くなり，また1，2層のようなモロサはなくなる。遺物，炭化物を多少含む。
5層　黒褐色土（7.5YR3/2）　粘質土，遺物炭化物なし。

第11図　SK04土壙

不詳。焼成不良。1，2とも胎土中に含まれる砂粒はごく少ない。

土師器杯（3）。浅黄橙色を呈する危弱な杯。胎土に2～3㎜の砂粒を多く含み，焼成は不良。底部は回転糸切離し。

黒色土器（4）。黒色土器は2個体分出土している。4は内面は器面が荒れてミガキの方向がわからないが，黒色処理されている。外面は灰黄色。底部は回転糸切離し。底部に関する限り再調整はない。底面の黒斑部分に「伴」の墨書あり。

須恵器壺（5）。ていねいな作りの胴上部が張る高台付の壺である。頸部より上を欠く。内面は青灰色，外面は青黒色を呈する。底面は高台を付した際の調整痕で切離し技法が判らない。

5．SX01，焼土遺構（図版8）

調査区中央部，第3層黒色土上面で発見された焼土遺構。直径約1.5ｍの円形の範囲内に焼土があり，その中に遺物が比較的集中している。焼土は全面均一ではなく小さなブロックをなしてよく焼けている部分とそうでない部分とがあり，最も厚いところで8㎝前後である。遺構の性格は不詳。

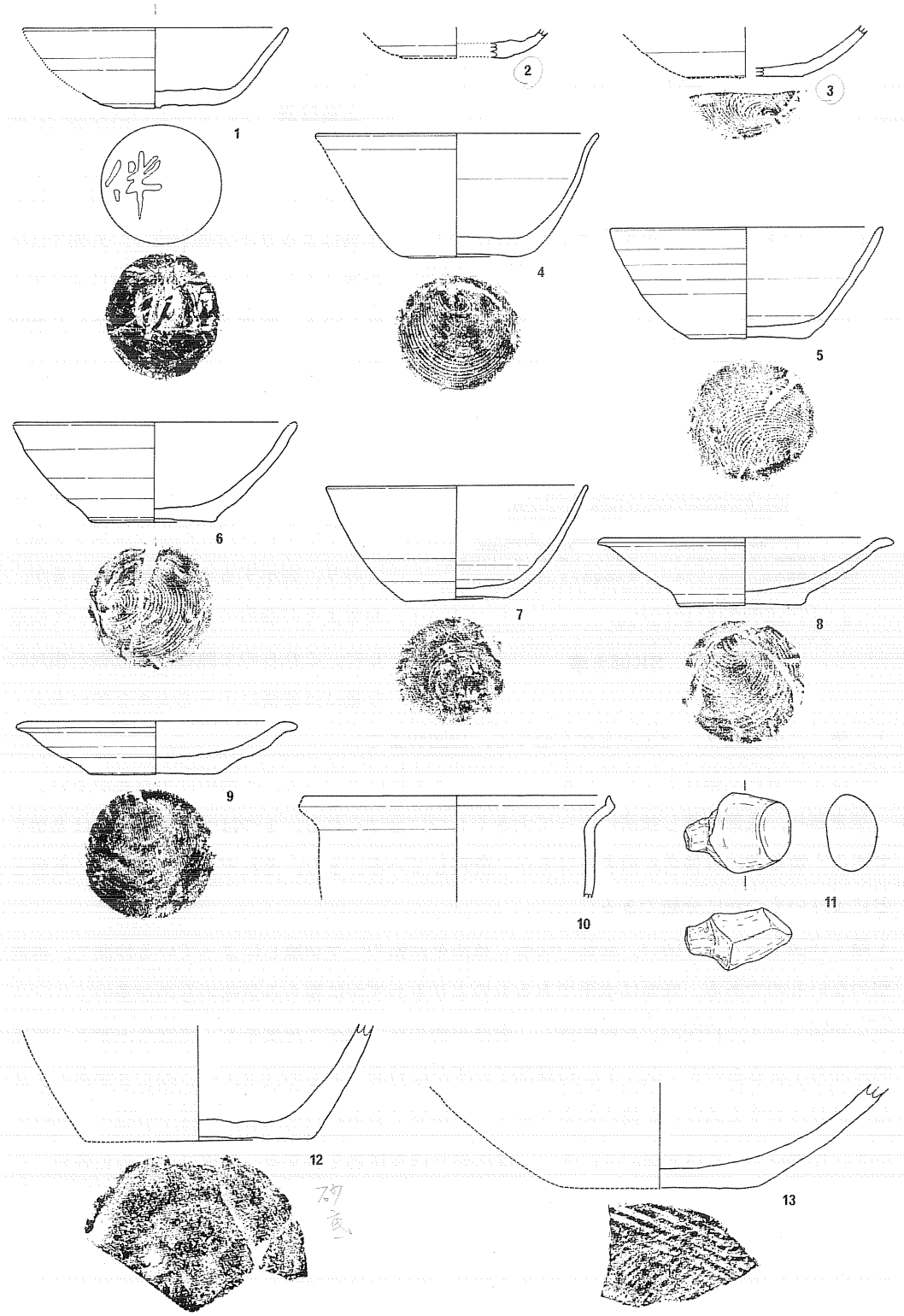
出土遺物（第15図，図版12）

須恵器杯（第15図1）。底径が小さく深味のある須恵器杯である。底部は回転糸切離しで，再調整はない。色調は内外面ともに白っぽい灰青色。胎土に細砂粒をわずかに含み，焼成は良好。口縁部に重ね焼きの痕が見える。底面には「伴」の墨書あり。

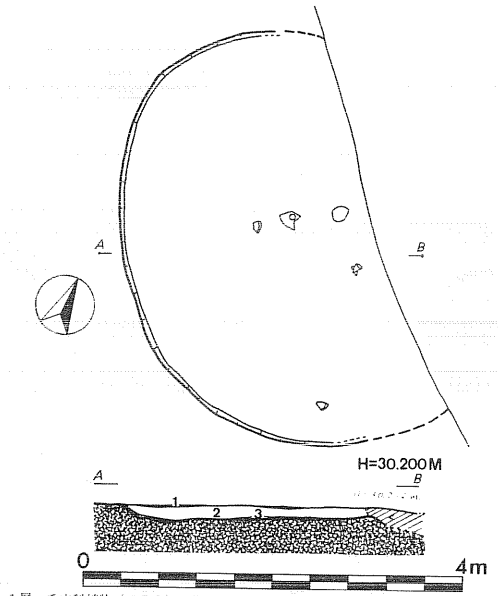
土師器杯（2，3）。2はやや小型の杯。3は椀に近い杯。2は底部回転糸切離しで，再調整はない。2，3とも色調は浅黄橙色を呈し，焼成は2は普通，3は良好である。胎土には細砂粒を含む。

須恵器蓋　4は本遺跡で2点しか出土していないうちの1つの蓋。外面は回転のヘラケズリによって調整され，内面には灰カブリの痕が明瞭である。青灰色を呈し，焼成良好。

須恵器甕　5は須恵器大甕の胴部上半，胴部中位に最大径を持つものであろう。外面には明



第12図　SK04出土遺物



1層　禾本科植物（ワラ？）の炭化ないし，灰状になった黒い層（厚さは5mm前後）
2層　黒～黒褐色土。ボソボソして軟かく，炭化物遺物を多く含む。
3層　黄褐色の硬い粒々が厚さ1cm～0.5cmの層をなしており，これがSX06が住居跡とすれば，床面にあたる物と思われる。
4層　暗褐色の粘質土で水路等を掘った後に堆積したものか？いずれにしてもここで遺構は切られており，これより右側はわからなくなっている。

第13図　SK06土壙

瞭なタタキ目，内面には青海波状のアテ具痕が残る。

土師器鍋　6，7は他の鍋に比べ，胴部から口縁部への立ち上がりがやや角度のあるものである。6の内外面には櫛状工具によるカキ目痕が残り，外面ではその後に手持ちのヘラケズリが斜位に施されている。両者とも黄橙色を呈し，焼成良好。

第2節　その他の出土遺物

遺構外から多くの土師器，須恵器が出土している。大部分のものは細片となっており，図示することは困難であるが，おおよその器形の判るものについて掲載した。これらの土師器，須恵器の相対的な量には器種によって大きな差がある。

1．杯　（第16図9，18図39を除く全てと，19図49まで）

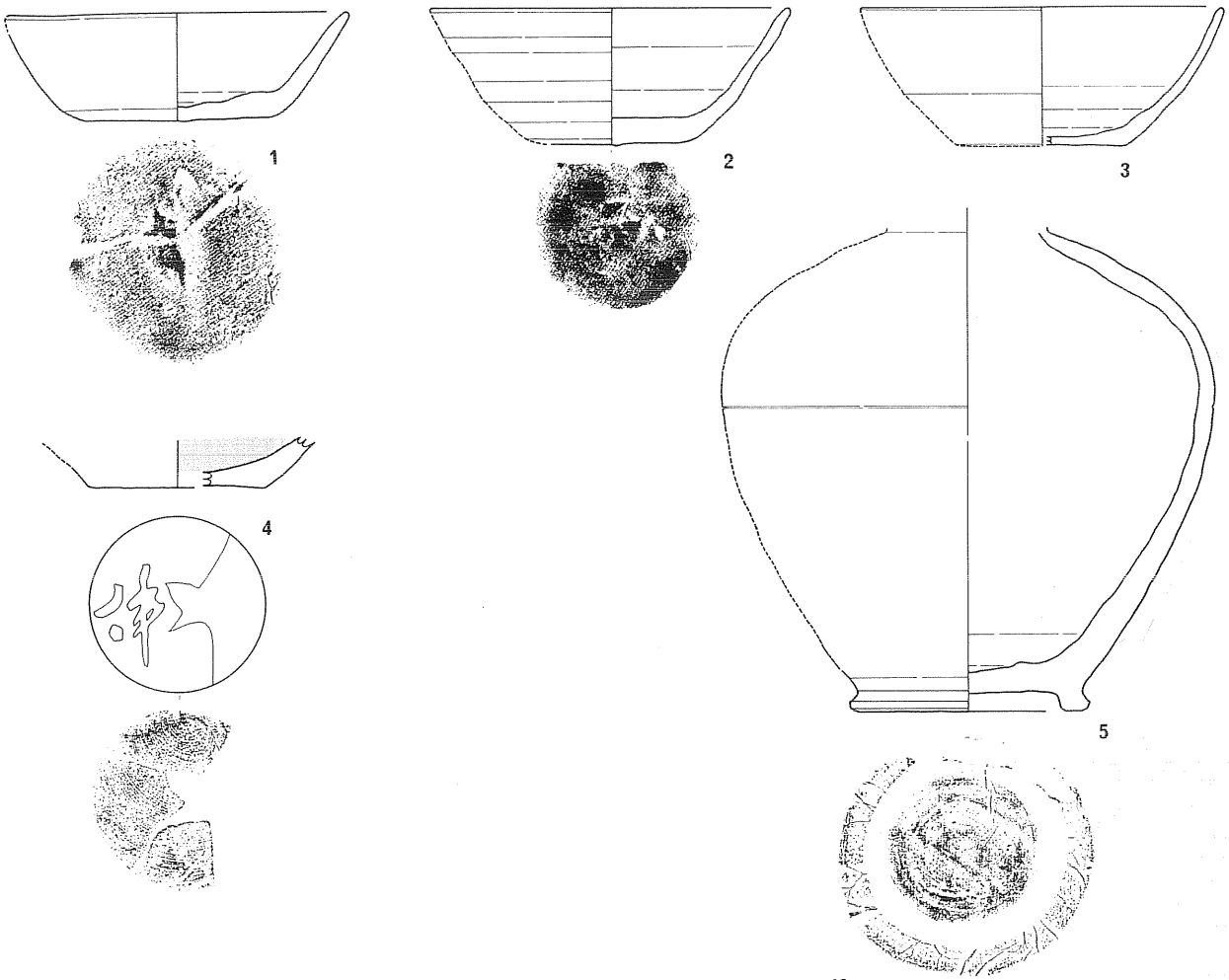
杯は土師器杯が細片となってしまっていることも理由となって，圧倒的に須恵器が多い。

須恵器杯，底部切離し技法によって大きく2つに分けられる。1つはヘラ切り，他は糸切りである。数量的には後者が前者をはるかに凌駕している。また，それぞれの中でもその形態などによりいくつかに分類できる。

1類：16図1～8，17図23。底部の切離し技法を回転のヘラ切離しによっている仲間で，再調整のないものである。底面は水平であるものよりもわずかに膨らみ気味のものが多い。

a：16図1～4，17図23。比較的浅く，胴部が他の杯に比べて角度をもって立ち上がる。直線的に立ち上がるものと（2，3），口縁部でわずかに外向するもの（1，4，23）とがある。また，口径に対する底径比が他の杯よりも大きい仲間でもある。平均で，底径÷口径＝0.485を示す。色調は1，2は灰色，3，4，23は灰白～浅黄橙色を呈する。焼成はおおむね良好。4を除いて底面に全て墨書，「伴」がある。4の底面にも墨痕が見えるが字は不詳。

b：16図5～8。aに比べ深さがあり，口径に対する底径の割合が小さい。再調整は全く施されていない。色調は灰白色～にぶい灰色を呈し，胎土には細砂粒をわずかに含む。焼成は6～8は普通，5は不良で軟かい感じがする。5を除き底面に墨書があり，6，7は「伴」であろ



第14図　SK06竪穴状遺構出土遺物

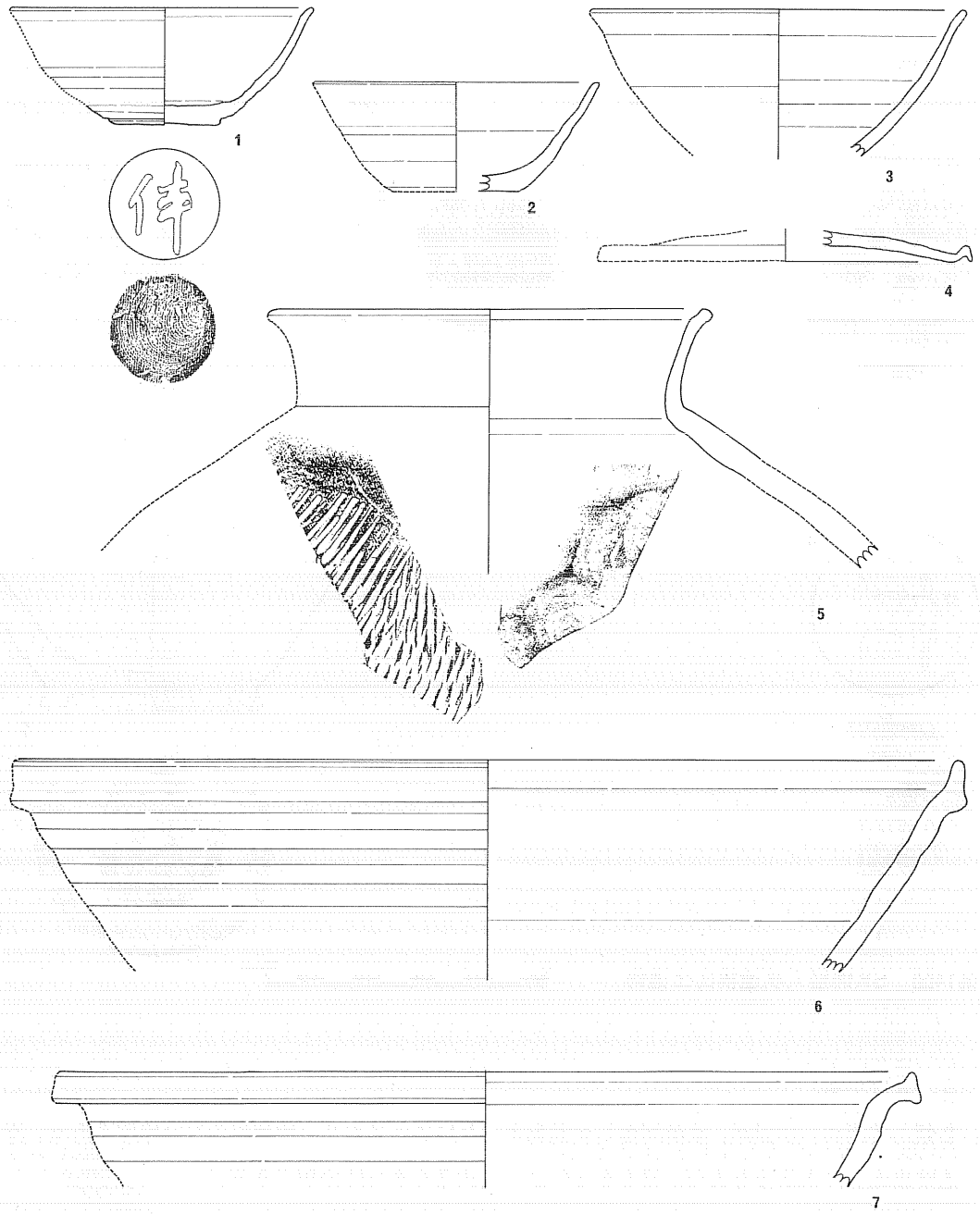
う。8は不明。

2類：16図10～18図38。底部切離しが回転糸切りによっており，再調整のない仲間である。本遺跡出土杯の大部分を占め，器形などによって大きく4つに分類できる。

a：胴部が直線的に開いて立ち上がる。口縁部はやや外向するものと，丸くおさめられるものがある。18，26，27などがこれである。

b：胴部がaと同じように立ち上がり，口縁部で大きく外向するもの。15，21などがこれである。

c：胴部が丸味を持って立ち上がり，口縁部がやや外向するもの。14，16などがこれである。



第15図　SX01焼土遺構出土遺物

d：深さがあり，胴部も丸味を持っているもの。杯よりも椀に近いものである。22，37，38などがこれにあたる。

これらの杯の色調は大半のものが青灰色を呈するが，他に種々の色調がある。10は浅黄橙色。16は口縁部だけ褐灰～黒褐色，他の部分と胎土は赤褐色を呈する。17は大部分うすい青灰色であるが，底部周辺は浅黄橙色を呈する。胎土には細砂粒をわずかに含むだけで，比較的良質の胎土である。焼成は１類に比べ硬くしまっている。器内外面に重ね焼きの痕跡である火ダスキの残るものもある。

底面を中心にして胴部などに墨書のあるものが非常に多い。字はほとんど「伴」と判断できるものであるが，墨痕だけのものもある。明らかに「伴」でないのは32だけである。

土師器杯　（第19図45～51，53）。図示できたのは８点である。色調は黄橙色から明褐色に近いものまであり，胎土には砂粒を多く含む。焼成は46，49が良好で他は不良でもろい。底部は回転糸切りで，再調整はない。50の底面には筆先を整えたような墨痕がある。51は口縁部が大きく外に折れ曲る器形で，皿であるかもしれない。

須恵器高台付杯　（第16図９，19図40～42）。いずれも深く，直線的な胴部を呈する杯（あるいは椀）の底部に高台を付したものである。高台は42を除いてほぼ垂直に立つもので，41は若干外側に踏んばる形を呈する。底部切離しは９が回転ヘラ切りの他は全て回転糸切りである。焼成は42が灰黄色を呈してやや不良である他は非常に良好である。特に９，41は胴部が黒褐色化している。

須恵器蓋　（第19図52）。小破片で１点だけ出土している。ＳＸ01出土のものに等しいと思われる。

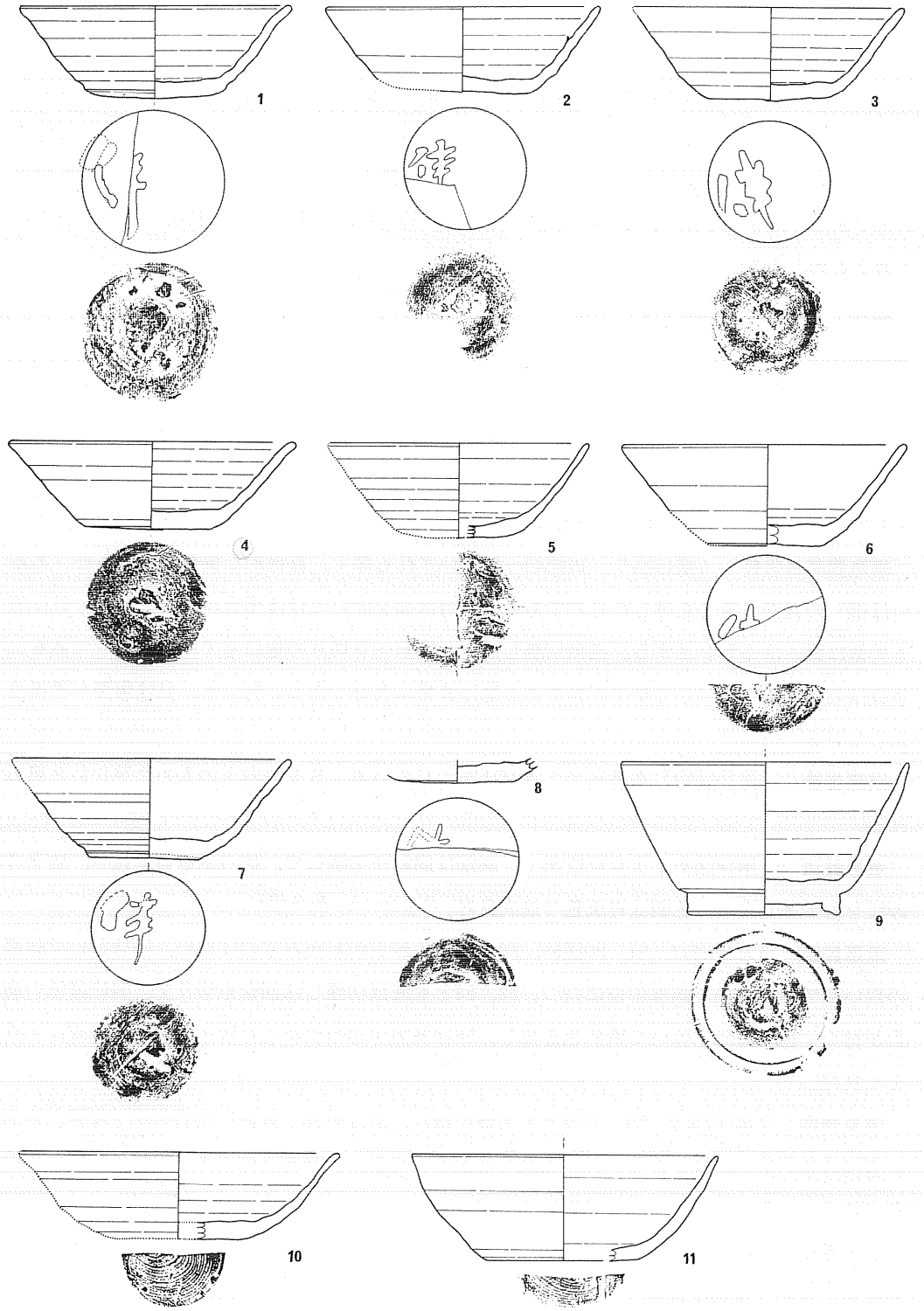
須恵器皿　（第18図39）。１点だけ出土。底部は回転糸切離しで，他の須恵器に比べ，胎土に砂粒を若干多く含む。色調は青灰色で焼成良好。

須恵器壺　（第19図53，54，20図55，56）。全体の器形がわかるものはない。55は広口で頸部の短い壺で，最大径を胴部中位に持つ。53，54とも底部切離しは回転糸切りで，54には低い高台が付く。色調は56を除いて青灰色を呈し，56は外面が赤味がかった灰色である。焼成は４点とも良好。

須恵器甕　（第20図57，58）。２点とも大甕の破片。57は肩部で外面に並行のタタキ目，内面に青海波状のアテ板痕がある。58は底部で外面タタキ目，内面櫛状のカキ目が残る。57は黄橙色で焼成やや不良，58は灰白色で焼成普通である。

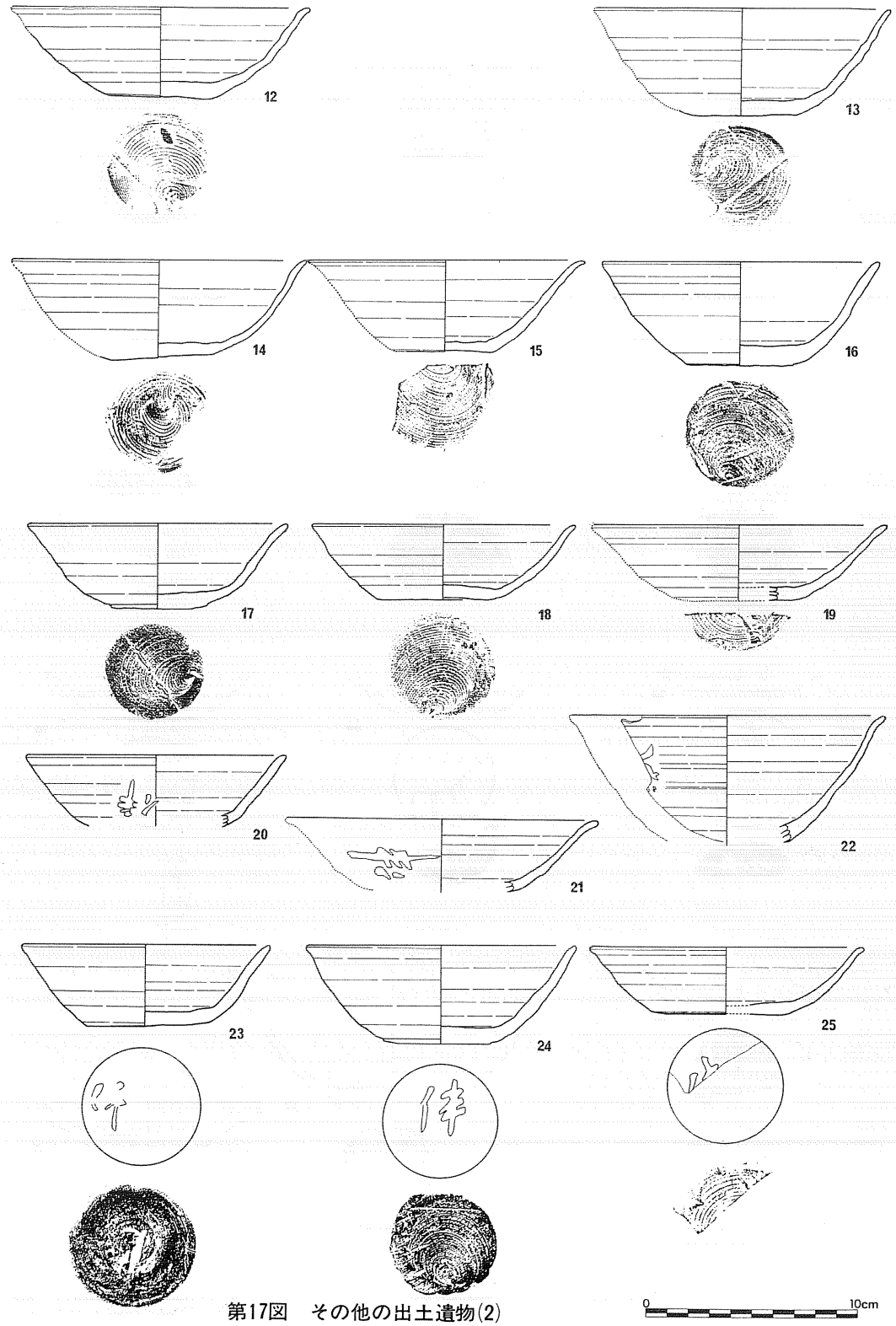
土師器甕　（第20図59）。比較的大型の長胴の甕と思われる。色調は褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。

土師器鍋　（第20図60）。外面には手持ちのヘラケズリが不定方向に施されている。色調は褐

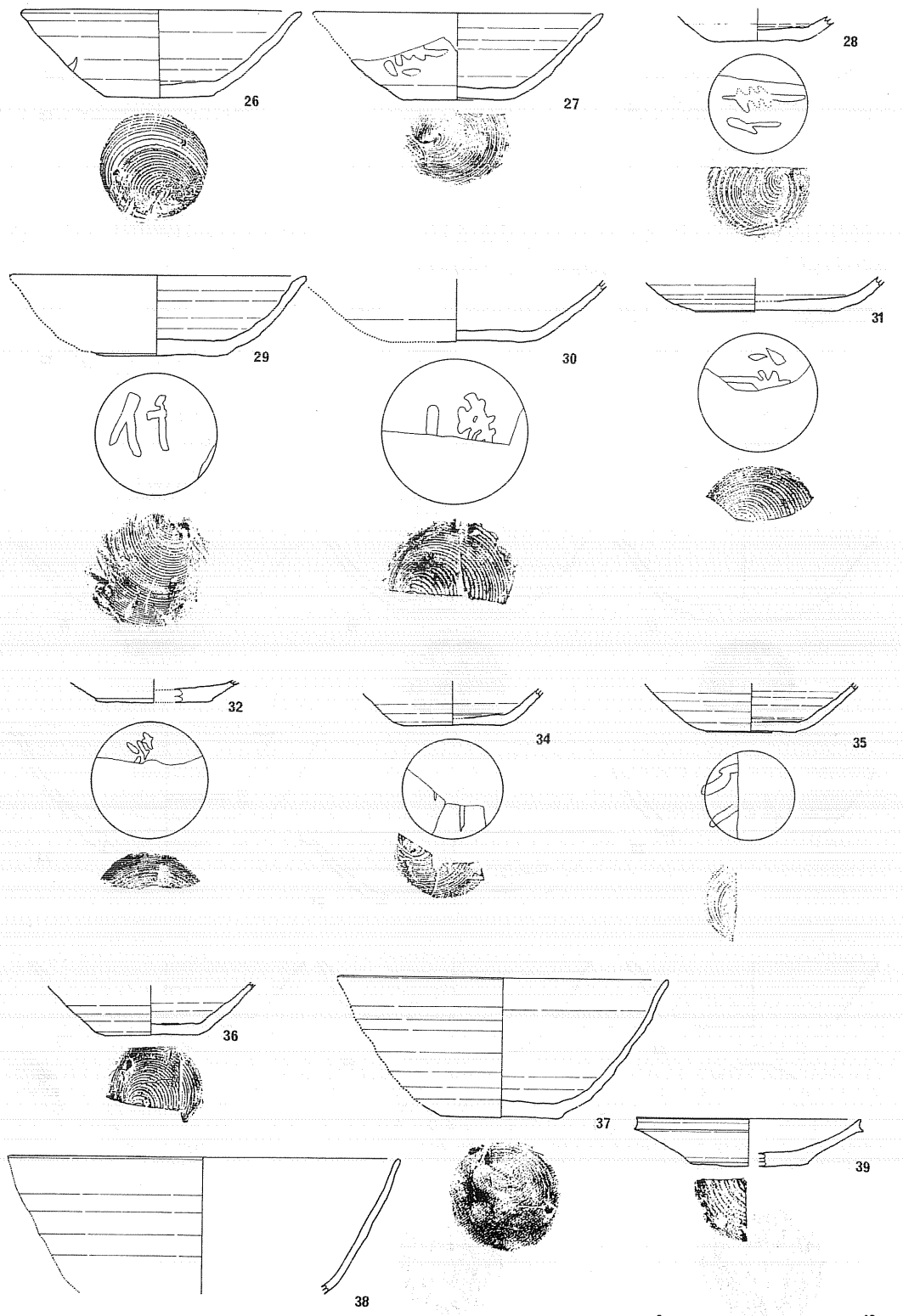


第16図　その他の出土遺物(1)

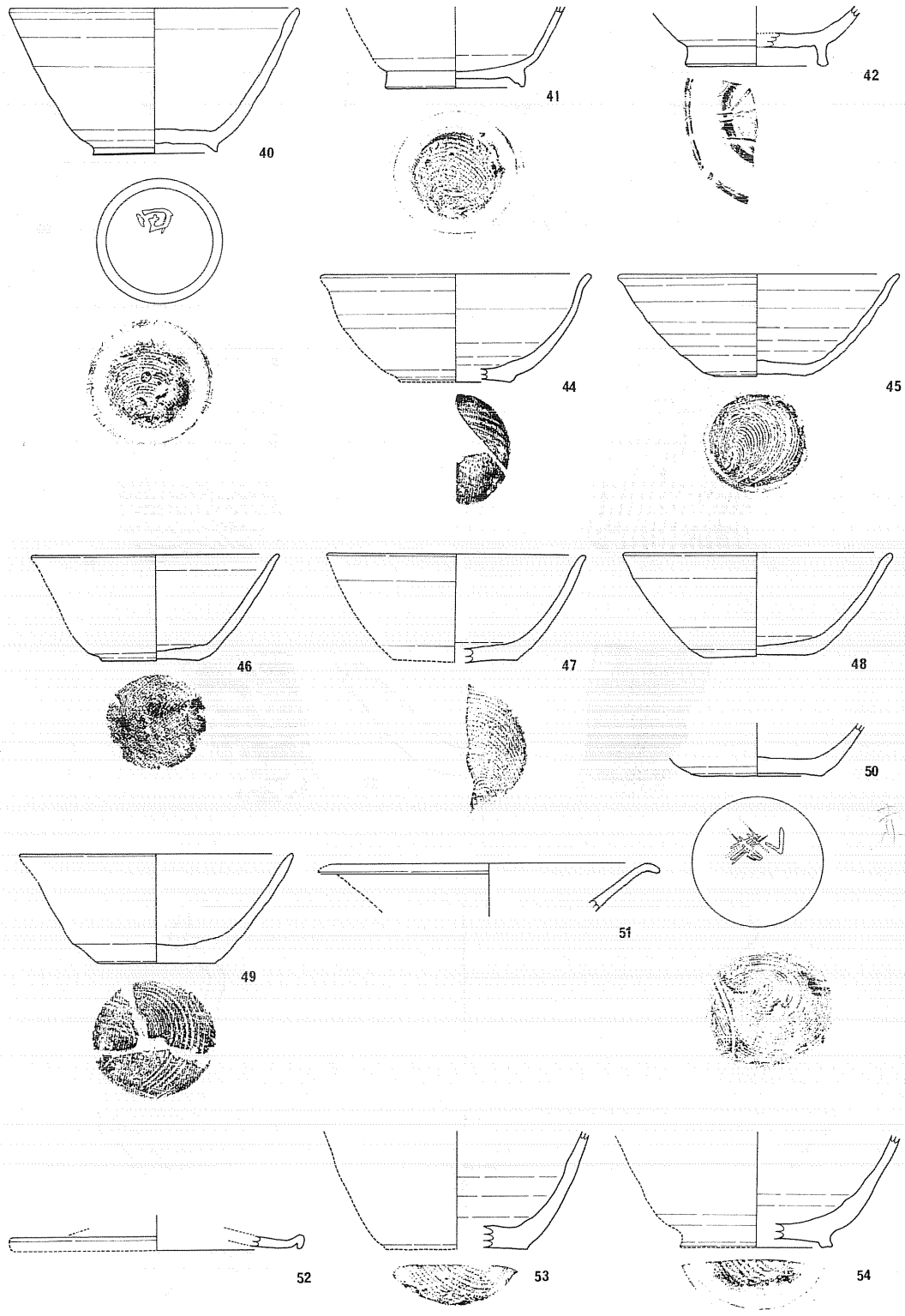
0　10cm



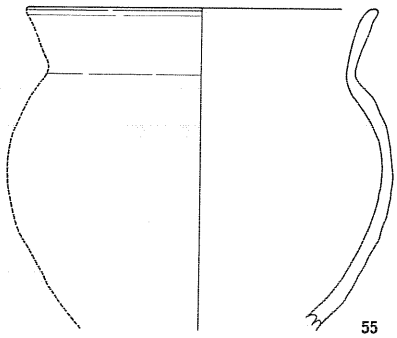
第17図　その他の出土遺物(2)

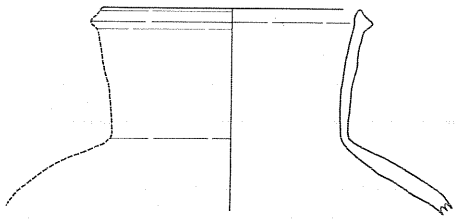


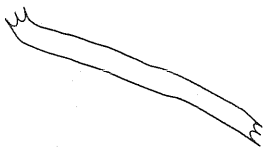
第18図　その他の出土遺物(3)

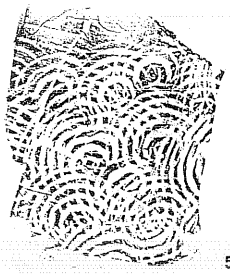


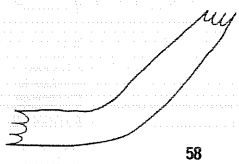
第19図　その他の出土遺物(4)

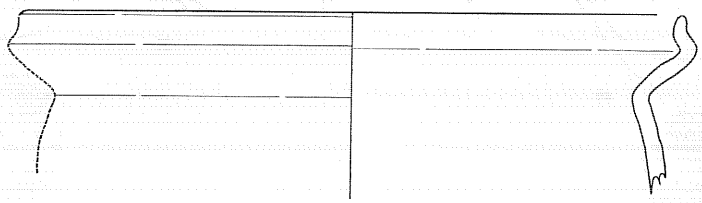


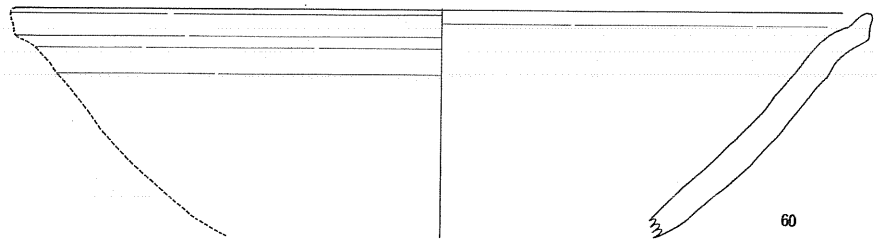












第20図　その他の出土遺物(5)

色を呈し，焼成良好。胎土に砂粒を多く含む。

第5章　ま　と　め

今回の藤木遺跡の発掘調査では約1,400㎡を調査した。その結果，掘立柱建物跡3棟，井戸1基，土壙2基，竪穴状遺構1基，焼土遺構1基の遺構と多数の遺物を発見した。これらの遺構と遺物について若干まとめてみたい。

1．遺構について

(1)　掘立柱建物跡　明確な掘立柱建物跡は3棟である。このうちＳＢ05とＳＢ07は桁行方向がＮ35.5°Ｗと，Ｎ36°Ｗでほとんど同方向であると考えてもよい。このことは2棟の掘立柱建物が同時に建てられたか，建物の方向に対する強い統一性が発揮された結果であると考えてよく，前者により妥当性があると思われる。2棟の建物の両側にあるＳＤ08，09，10のあり方からもうなずけるところである。

また，ＳＢ07とＳＢ11の建物の位置関係を見てみると，ＳＢ07が細長い建物であると仮定した場合，両者が同時存在することは考えられない。このこととＳＢ11の桁行方向がＳＢ05，07とは異なることなどから，ＳＢ11と他の2棟の建物間には時期差があると考えられる。

3棟の建物は，たまたま畑地として残った部分で発見されたものである。未調査の水田部分（後世の耕地整理等で削平され，遺構として残ってはいないと思われる。）にもこれらの建物に連続するような建物が存在した可能性は十分に考えられるところである。

3棟の建物の時期は，柱掘方内から良好な建物が出土しなかったこともあり即断できないところもあるが，周辺から出土している遺物に等しい時期と考えられる。

(2)　井戸跡　井戸跡は1基のみであった。しかし，県内ではこれまでこの時期の例はあまりなく，その構築方法と合わせて興味あるところである。ＳＥ03では隅柱を用いず，厚さ約5㎝，幅20㎝，長さ90～100㎝の板を井桁状に組み合わせ，板の端を井壁の粘質土につき差して固定するという工法がとられている。

(3)　土壙など　2基の土壙の性格は判らない。径2.2～2.4ｍの円形のものと，長径3.5ｍ×短径2.6ｍの楕円形のものが発見されている。断面の形状は両者ともゆるい皿状を呈し，その底面近くには禾本科植物が炭化したと見られる層があった。また，埋土中には火山灰の堆積も見られた。何時頃降下したもので，どこから運ばれたものであろうか。

ＳＫ06竪穴状遺構と，ＳＸ01焼土遺構はともに竪穴住居跡とそのカマド（同一住居跡のものではない）とも考えられるが，どのようなものであったのだろうか。

2．遺物について

須恵器と土師器が出土している。量的な比較では土師器が若干須恵器を上回る。

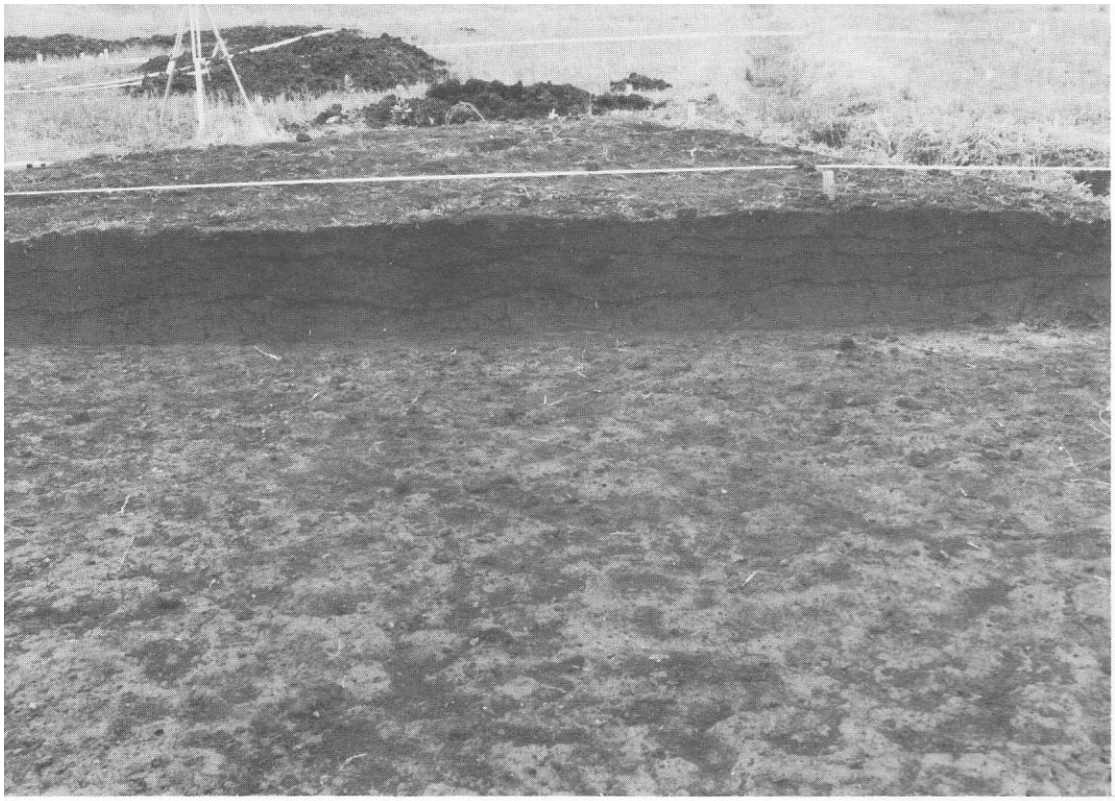
土師器では杯が圧倒的に多く，次に甕がある。この他に数量的には少ないが，口縁部が大きく外に折れ曲る皿や，内外面にタタキ目，アテ板痕，カキ目などのある鍋も出土している。また，県南の方ではあまり類例がなく，主に県北の館跡などから出土する底部に砂粒の付着したものもある。黒色処理された土師器はほとんどない。

須恵器では杯，蓋，壺，甕などが出土している。このうち杯では底部切離し技法に2種ある。底部の個数のみでこれを比較すると，回転ヘラ切離し25に対して，回転糸切離しは162である。

杯や高台付杯の底面などに墨書のあるものが約40点ある。このうちの約⅔は「伴」の墨書である。「伴」以外で明確にわかるものは「田」1点である。

図版 1　上　遺跡全景（東▶）

下　発見遺構全景（南東▶）

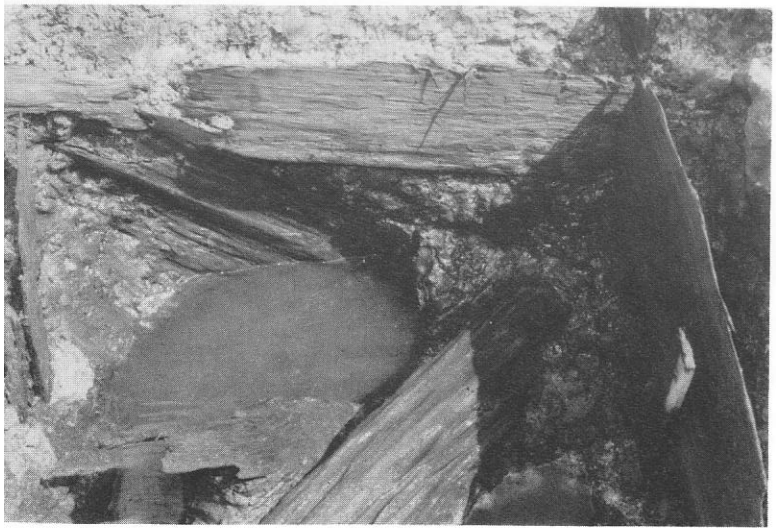


図版 2　上　調査区土層状態（北▶）

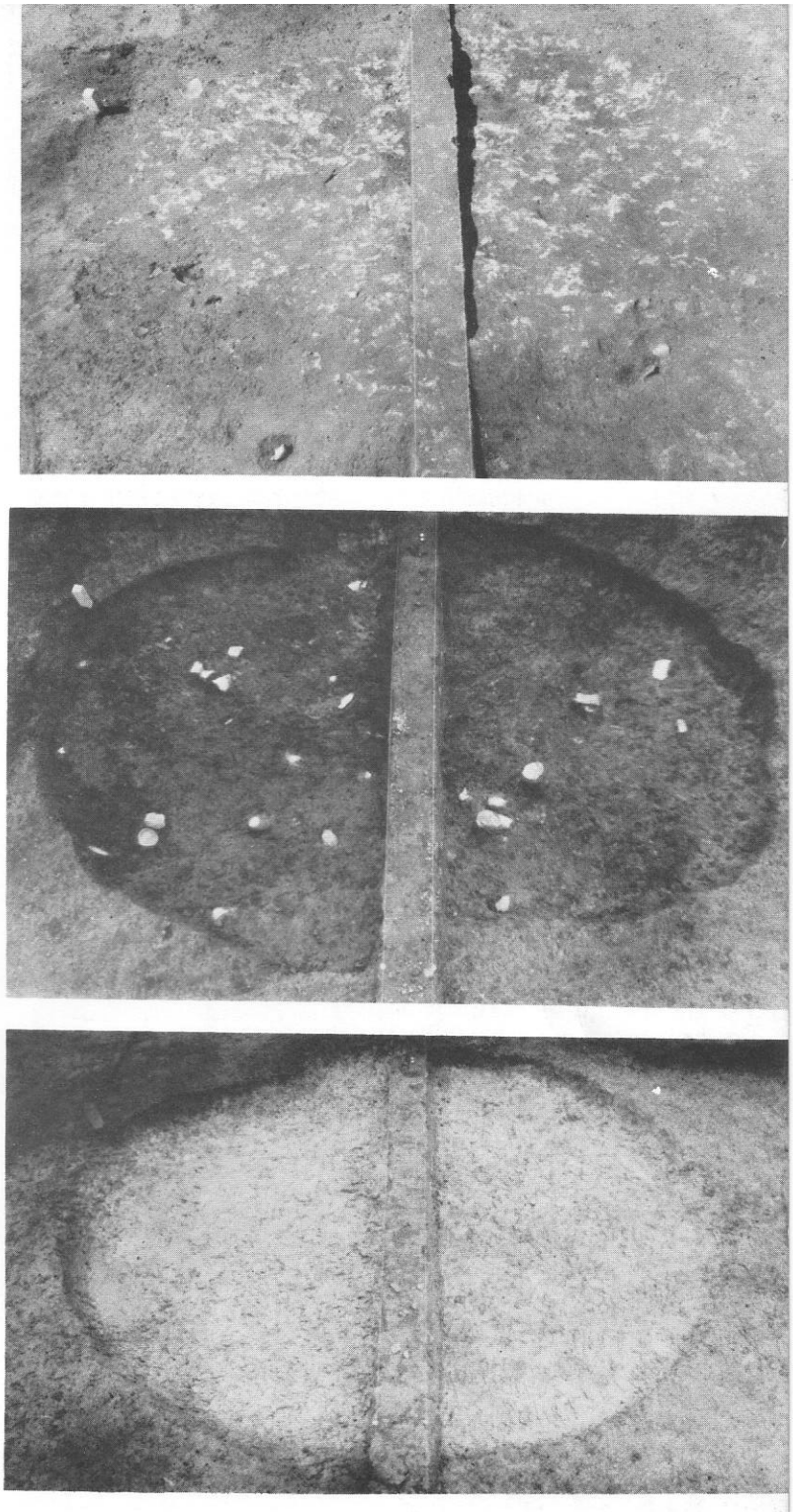
下　SB05　掘立柱建物跡（南東▶）

図版 3　上　SB07　掘立柱建物跡（南東▶）

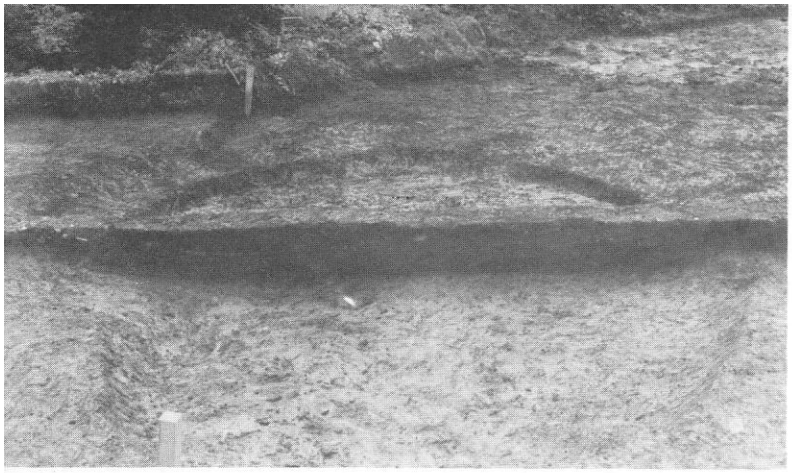
下　SB11　掘立柱建物跡（南▶）

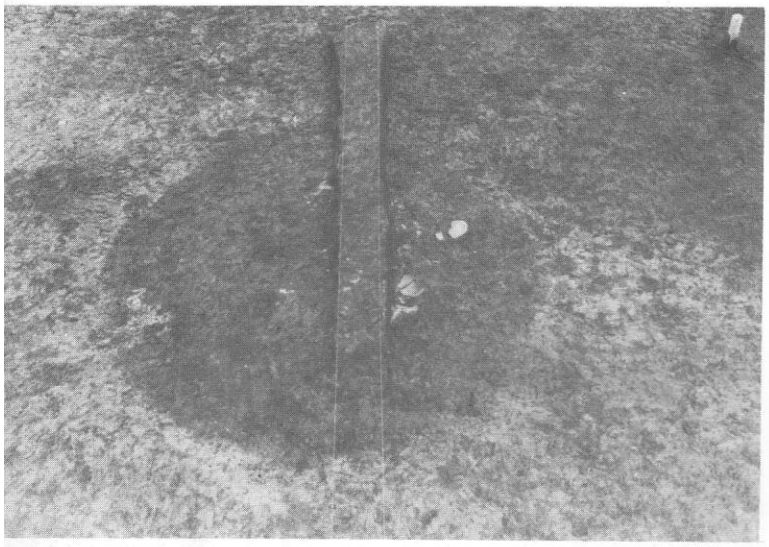


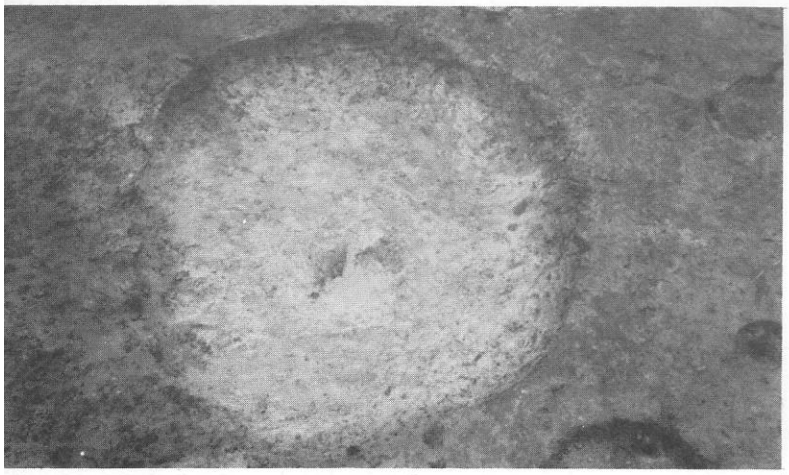
図版 4　上　SE03　井戸跡
中　同上
下　同上



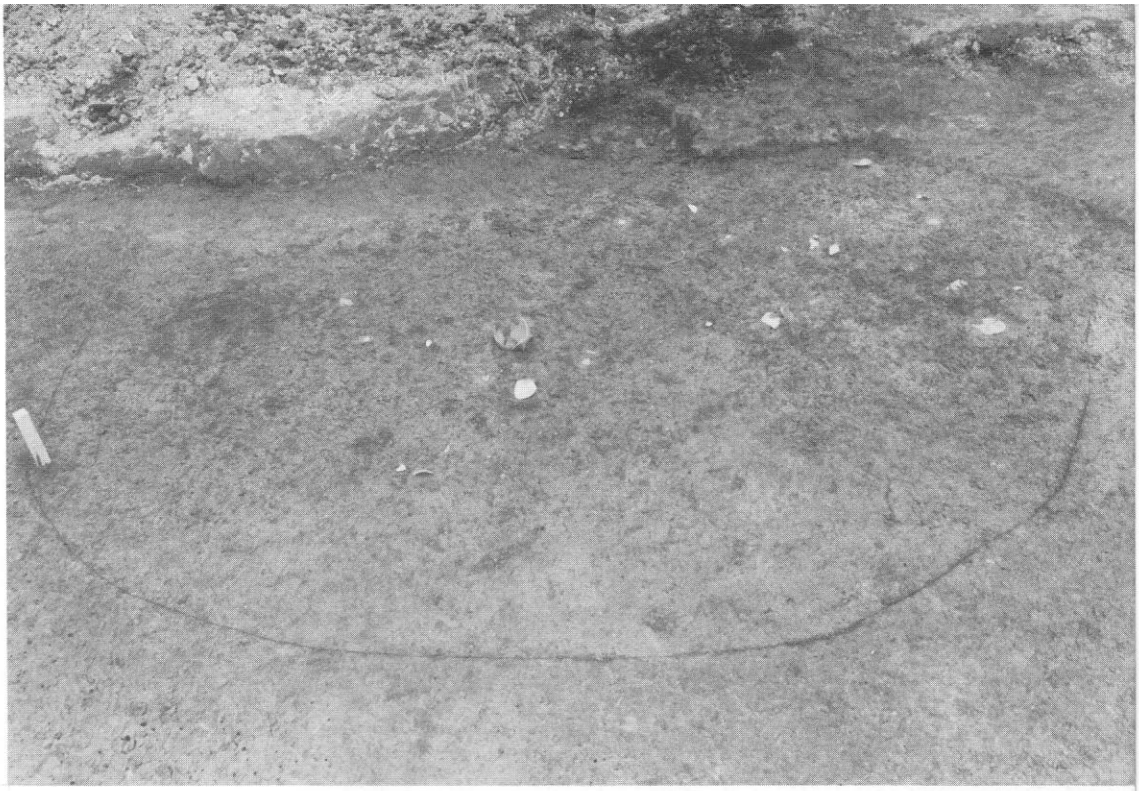
図版 5　上　SK02　土壙（南▶）（火山灰）
中　同上　（遺物出土状況）
下　同上　（完掘状況）

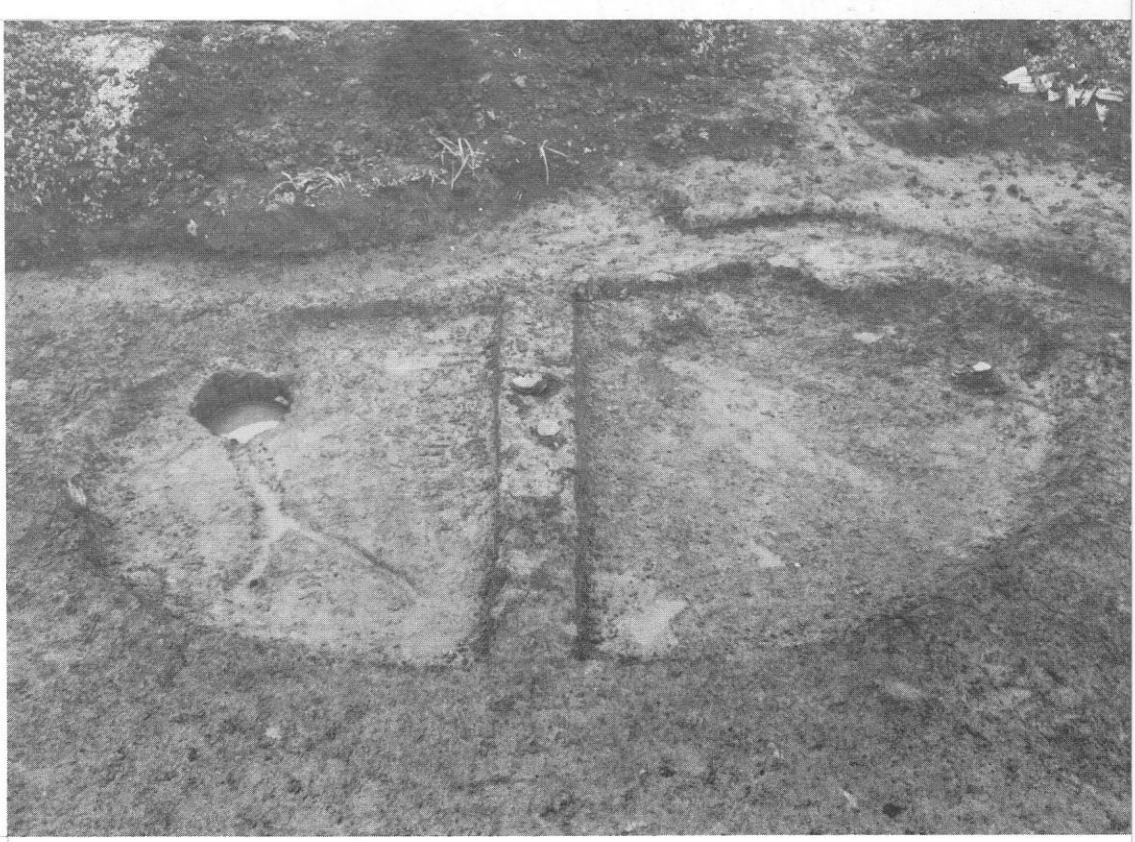




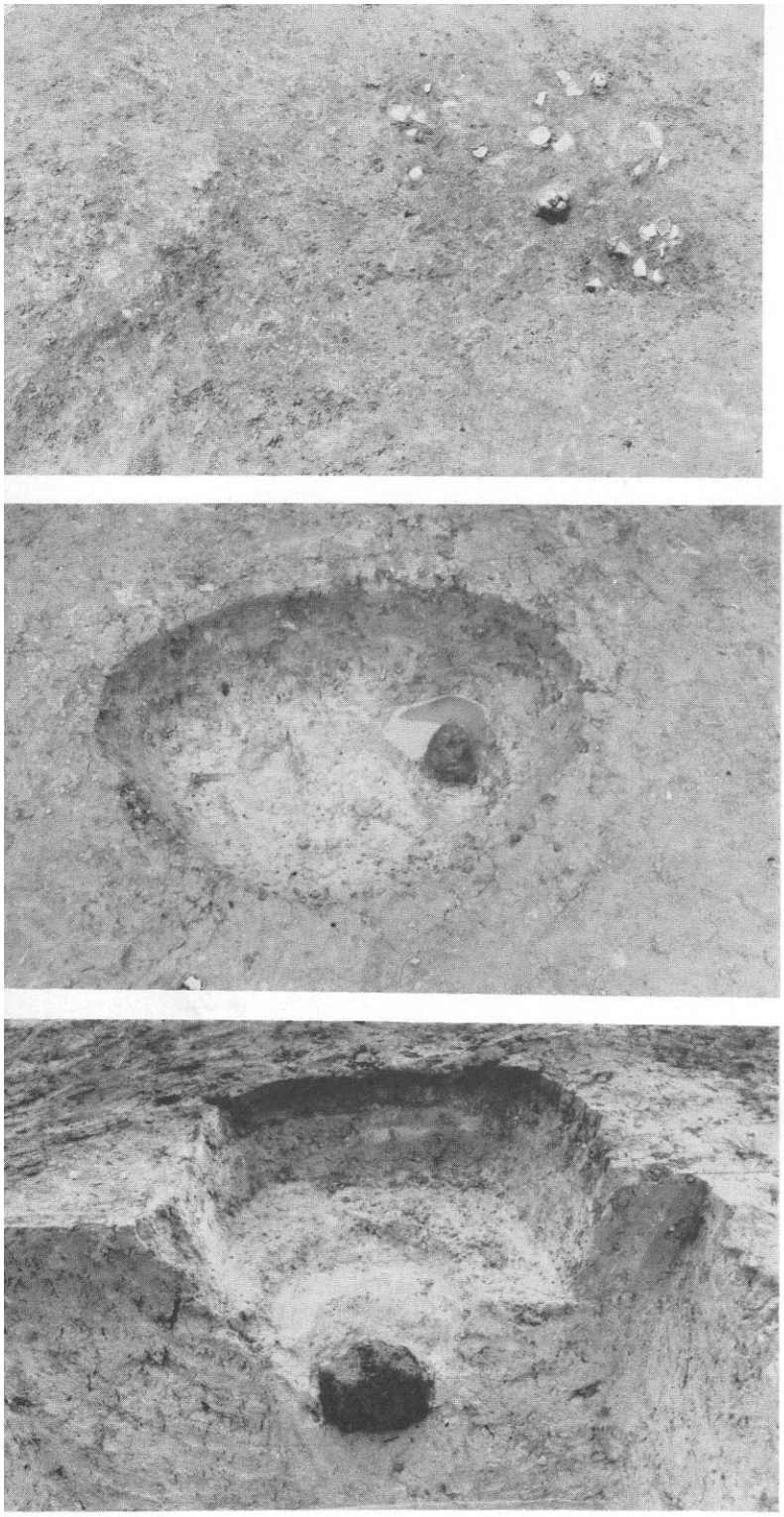


図版 6　上　SK02　土壙完掘状況（西▶）
中　SK04　土壙（南▶）
下　同上

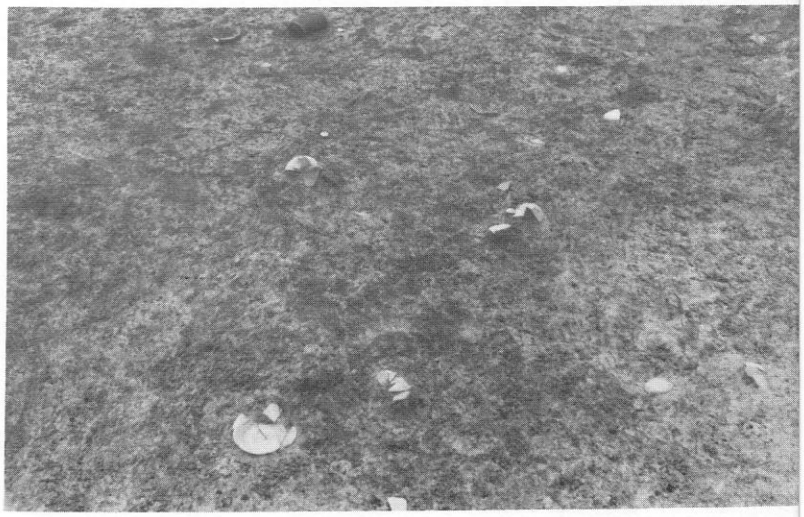




図版 7　上　SK06　土壙（南▶）（遺物出土状況）
　　下　同上　　（完掘状況）



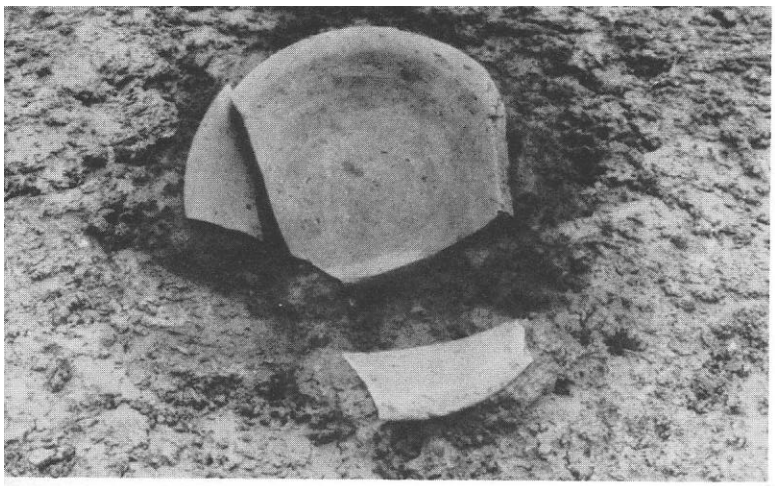
図版 8　上　SX01　焼土遺構
中　SB05　柱穴完掘状況
下　同上

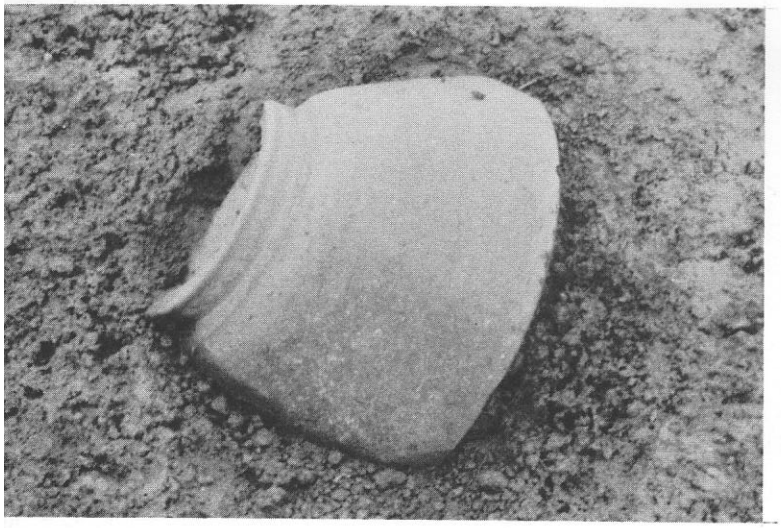


図版 9　上　柱穴断面状況

中　柱穴完掘状況

下　遺物出土状況

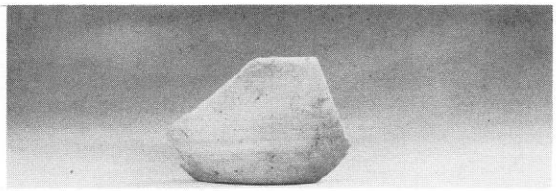




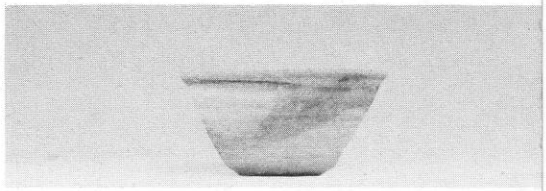
図版10　上　遺物出土状況

中　同上

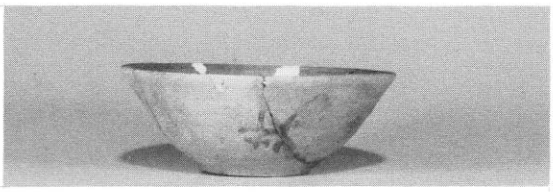
下　同上



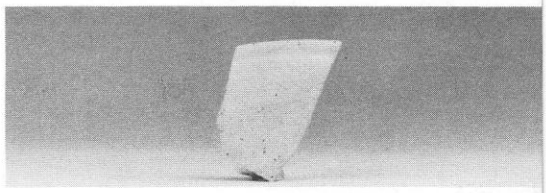
SE03 1



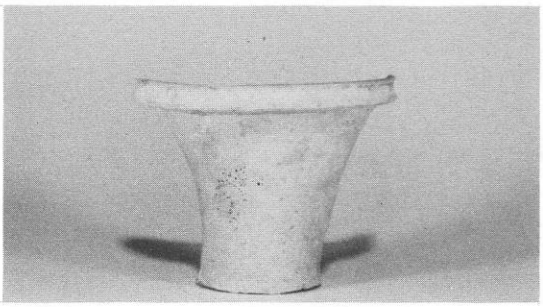
2



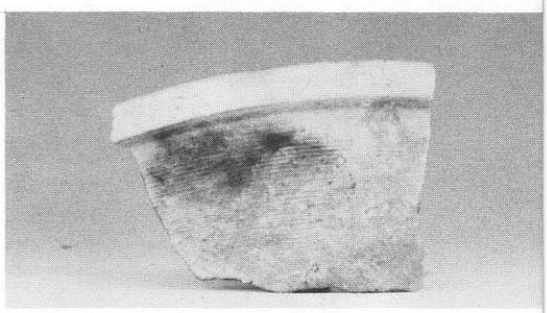
3



4

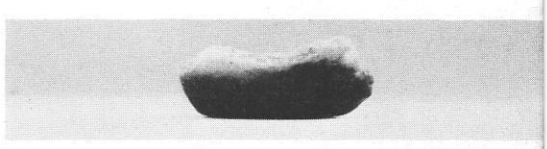


7

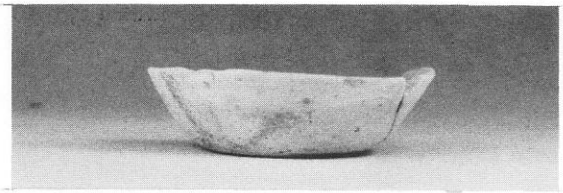


SK02 9

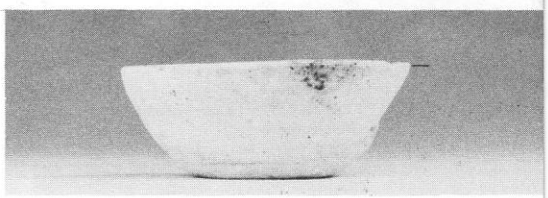
12



SK04 11

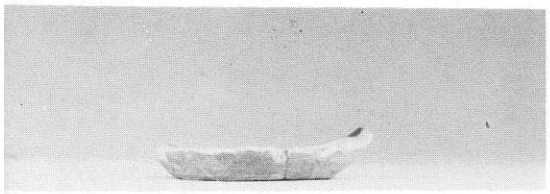


SK06 1



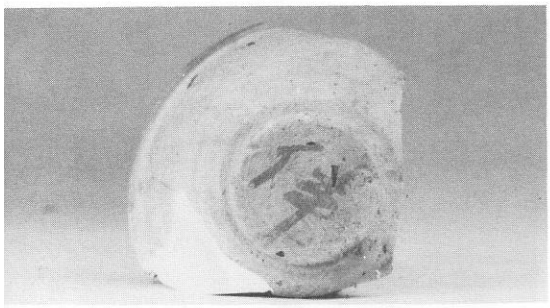
2

図版11　SE03，SK02，SK04，SK06 出土遺物



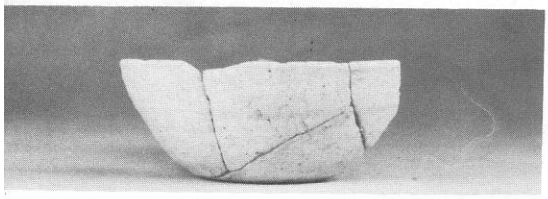
3

5

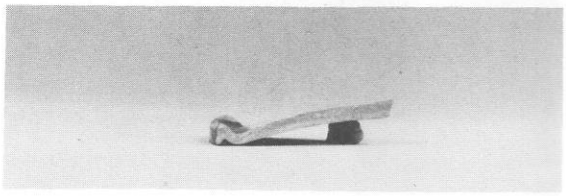


SX01 1

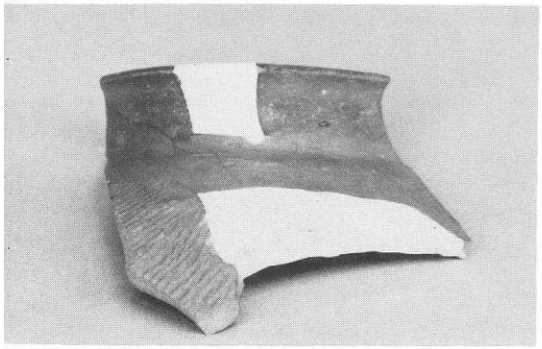
1



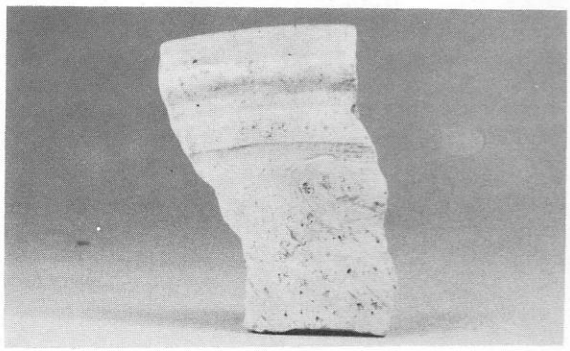
2



4



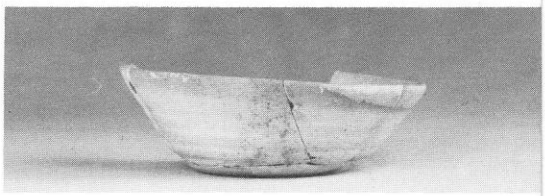
5



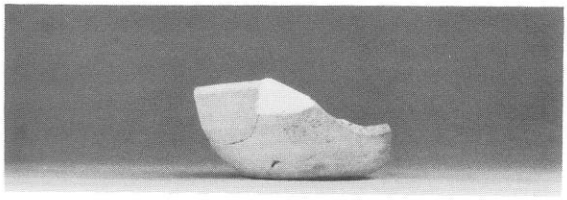
6

図版12　SK06，SX01 出土遺物

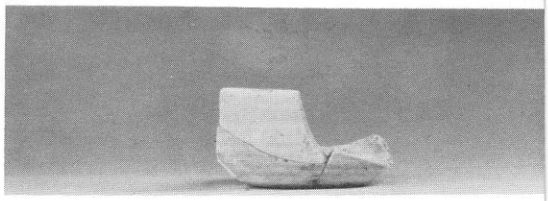
1



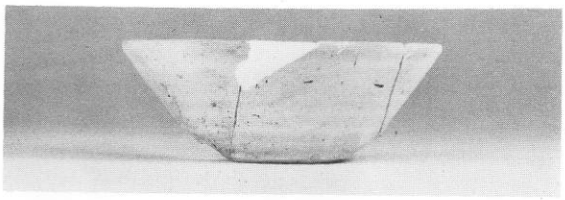
2



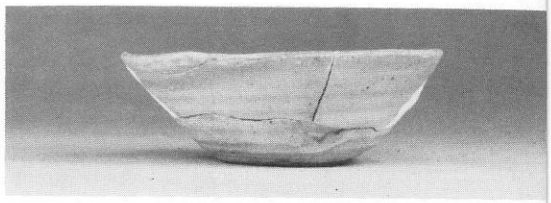
4



5

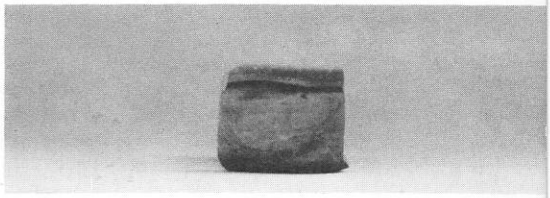


6

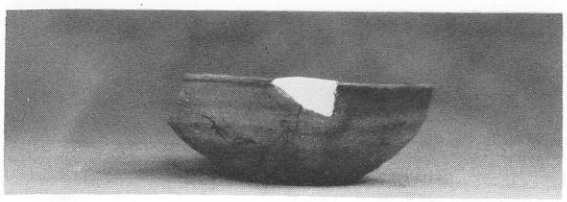


7

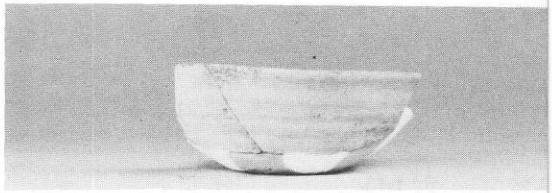
9



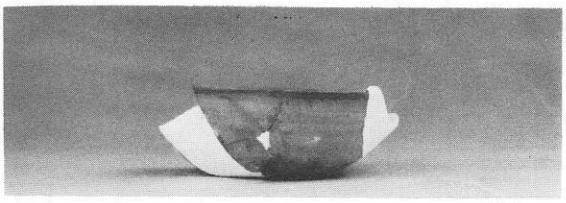
11



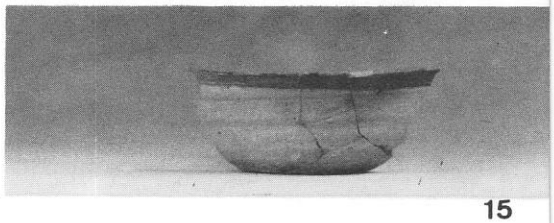
12



13

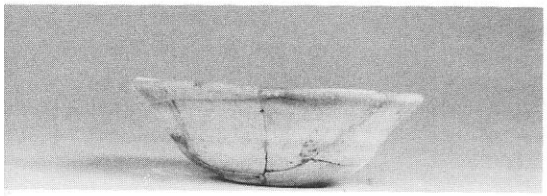


14



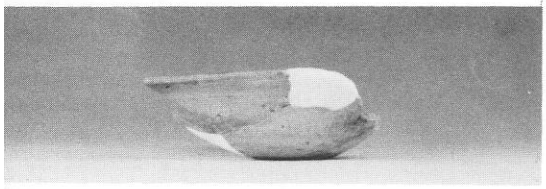
15

図版13　その他の出土遺物(1)

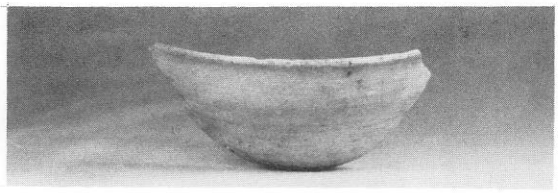


17

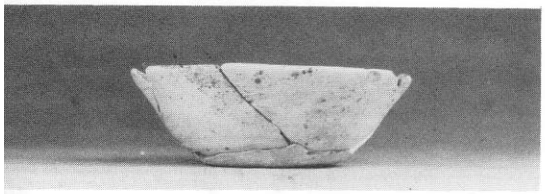
18



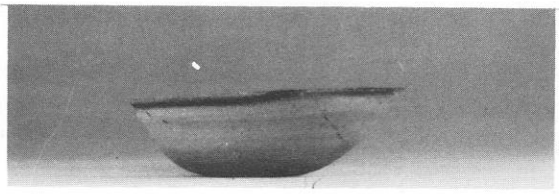
19



22

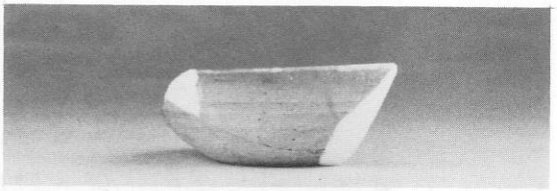


23

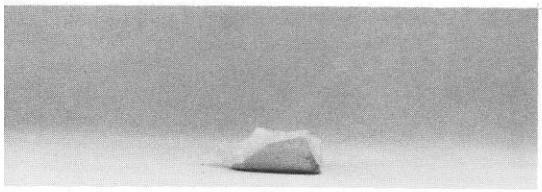


25

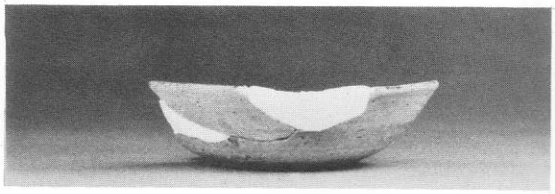
26



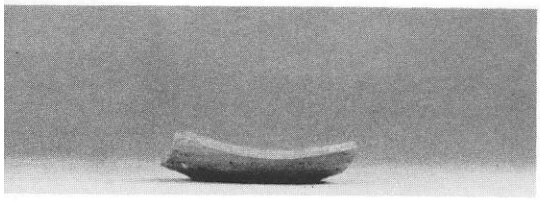
27



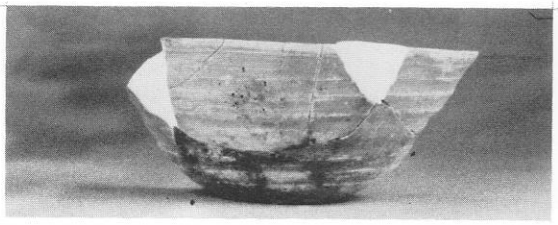
28



29



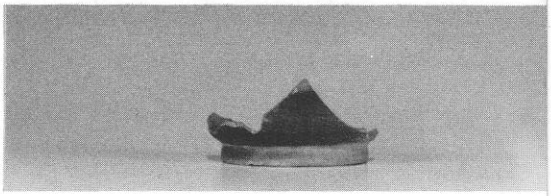
31



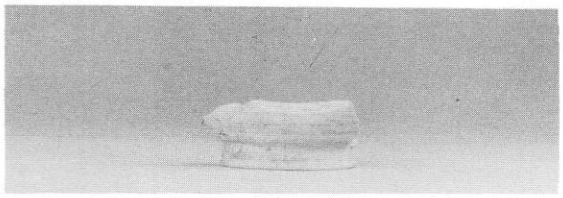
37

図版14　その他の出土遺物(2)

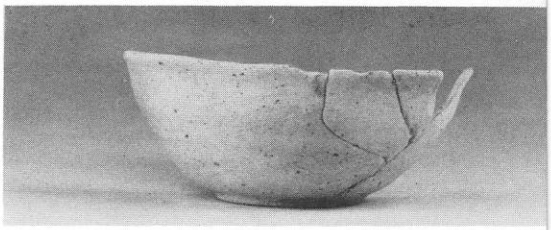
40



41



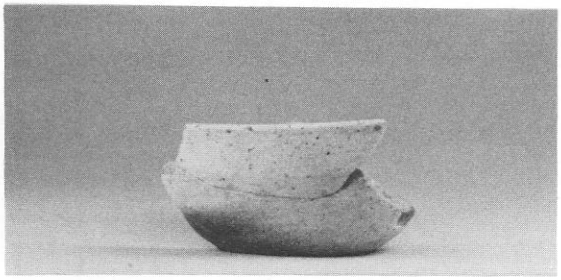
42



44

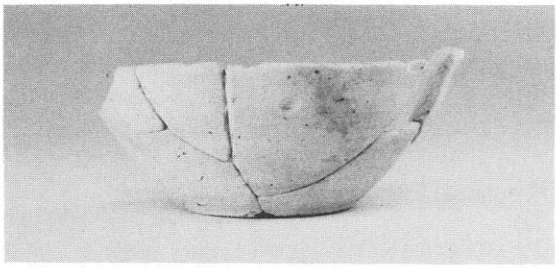
45

46

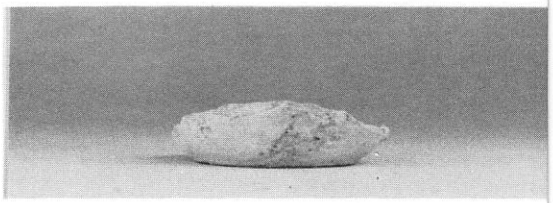


47

48

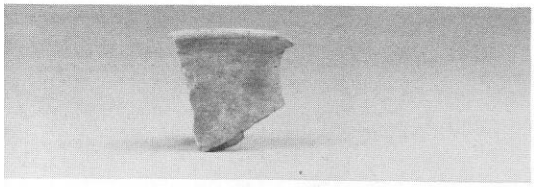


49

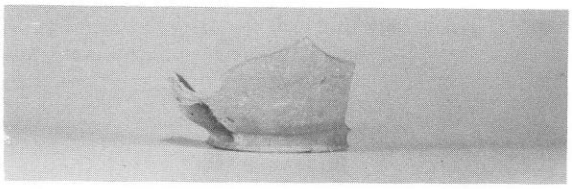


50

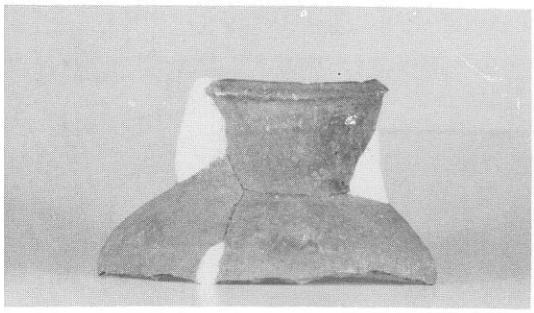
図版15　その他の出土遺物(3)



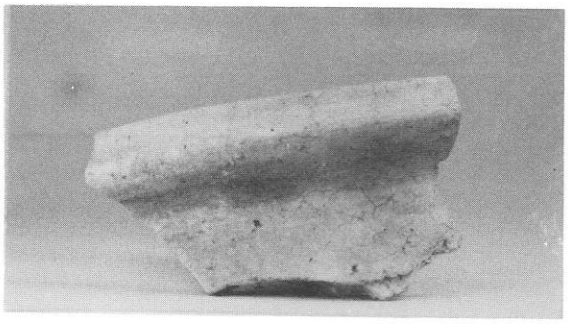
51



54



56



59

図版16　その他の出土遺物(4)